

郷 想 理

363.2
Mo78

363.2-Mo78ウ
1200700557558

NEWS FROM

著 スリモ・ムノノハ
譯 抄 彦 利 塚



TOKYO
A R S
1920



始



9.3.2. 禁止
訓. 502号

函	
安	22
號	
永久保存	

11-

363.2

Mo 98



堺

利

彦

抄

譯

理想郷

及百年後の新社會

モリアム

ベトワミイト



東京
アル
ルス

11

11

11

982
216

はしがき

『理想郷』はキリアム・モリス William Morris の著『ニュース、フロム、ノーホエア』
『News From Nowhere』を抄譯したもの、『百年後の新社會』はエドワード・ベラミー
Edward Bellamy の著『ルツキング、バックワード』『Looking Backward』を抄譯した
ものです。

モリスは一八三四年から一八九六年まで生存した、英國の詩人、美術家、社會主義
者であります。彼は初め『太平に吟詠する一閑人』と稱して詩歌藝術に耽り、殊に空
内裝飾の事に熱中してゐたが、其の經驗上、商業主義の結果として近世藝術の墮落し
た事を痛感し、遂に社會主義者として其の宣傳に従事する事となり、労働者に向つて
路傍演説をやるまでの熱心を示した。一時『社會主義同盟』といふ團體を作つた事も

(1)

(2)

あり、『コンモン、ウイール』といふ雑誌を發行した事もある。論文的及び小説的の著書も色々あるが、其中で此『ユトピア』が最も善く知られてゐる。此書は社會主義の理想が實現された時を想像して、其の社會状態を描寫したもので、殊に其の詩的な、美的な、自由な、悠長な生活ぶりが、人の心を引くに足る。此書の題名は『無何有郷の消息』とも譯されてゐる。

ベラミーは一八五〇年から一八九八年まで生存した米國の文士で、之も初は只だ空想的の小説ばかり書いてゐたが、後ち國有主義の立場から『ルツキング、バックワード』を著はした。此書の題名は『回顧』といふ意味で、紀元二千年から十九世紀を回顧したといふわけである。此書は社會主義のユトピア物語として忽ち世上の大歡迎を受け、一時非常なセンセーションを國內に起し、遂にベラミー俱樂部といふ團體を生じ、次いで國有運動を誘起するまでに至つた。

一體、ユトピアといふ言葉は、トーマス・モア『Thomas More の『ユトピア』"Utopia"

が起りで、それは一五一六年、英國で發行された有名な理想社會の空想記である。ユトピアとは矢張りノーホエアと同じく『無何有郷』といふ意味である。それから以後理想社會、若しくは理想國の事を一般にユトピアと呼ぶ事になり、又モアを眞似た種々のユトピア的著述も現はれたが、ベラミーの書に至つて最も顯著な影響を社會に及ぼしたのである。

(3)

然し、ベラミーの理想は前記の通り國有主義で、其の餘りに集中的な、劃一的な、強制的な考へ方に反對する者が少なくなかつた。そこで社會主義者中でも、寧ろアナキスチツクの傾向を帯びてゐた。モリスは少しくそれに當てつける位の心持で、極めて自由な生活状態を描出したものらしく思はれる。故に此の二書の内容を比べて見ると、同じく社會主義の理想と云はれながら、實は大變に違つた二つの光景を現出している。そして今日になつて見ると、ベラミーは最早や殆んど顧みられず、モリスはいつまでも多くの人に愛讀されてゐる。けれども我々としては、モリスを讀んだ後に

(4) 参考として、對照として、ベラミーを読む事も亦た決して無益ではない。此の抄譯は二つとも、私が餘ほど以前に小冊子として發行したもので、近來は全く絶版になつてゐたのだが、此頃の陽氣に促がされて、少しづつ訂正を加へ、更に合冊として、發行する事にした。『理想郷』では、『危険』な箇處を大ぶん多く削除した。

大正九年二月

堺 利彦

目次

理想郷 (キリアム・モリス)

- (1)
- 一、テームスの中流の水浴、新世界の案内……………一
 - 二、客館の朝飯、四十二歳の婦人……………七
 - 三、花園の様な田畑、ハマスミスの市場……………一二
 - 四、ケンシントンの森、天幕生活、學校、教育……………一五
 - 五、昔の倫敦の面影、煙草とパイプ……………二一
 - 六、怠惰の遺傳者、道路の修繕……………二七
 - 七、博物館、百五歳の老翁、男女の關係……………二九

(2)

八、挽臼の如き昔の教育、新社會の家庭生活……………三八

九、貧民窟の大掃除、都會の村落化……………四一

一〇、〇〇〇無國會、戦争と勞働者……………四四

一一、民法の消滅、刑法の廢止……………四六

一二、政治……………五一

一三、〇〇〇〇〇、多數決の事……………五一

一四、勞働の報酬、文明人の偽善と殘忍……………五四

一五、美人アンニー、川岸が一面の公園、不平家……………六一

一六、枯草の收穫、野生の美人、戀の人殺し……………六七

一七、草原の上の娘達、新らしい手工時代……………七一

一八、夏の初め美しき畫圖、自然と同化する人の子……………七四

百年後の新社會 (エドワード・ベラミイ)

(3)

一、結婚式の延引、睡眠術……………七九

二、百十三年の眠……………八〇

三、エチス……………八四

四、新社會の繋ぎの鎖……………八五

五、國民勞働隊……………九〇

六、同情の手……………九四

七、一樣の分配……………九六

八、商品陳列所……………一〇〇

九、音樂、遺産、家事、醫者……………一〇二

(4)

一〇、労働隊の奨励法、患者隊……………	一〇六
一一、世界聯邦、國際會議……………	一一〇
一二、道路の雨蔽、公食堂……………	一一一
一三、著述及新聞……………	一一五
一四、行政組織……………	一二七
一五、監獄、裁判所、警察、地方制度……………	一二〇
一六、教育制度、個人生活の損失……………	一二三
一七、エヂスの秘密、婦人の地位……………	一二六
一八、昔のエヂスと今のエヂス……………	一三一

理想郷

キリアム、モリス著

一、チームス中流の水浴、新世界の案内

私は倫敦のハマスミスの私の家の寢床で目が覺めた。見れば夜具も何も踏みぬいでゐる。それも其筈、朝日がさしこんで大變に熱苦しい。飛び起きて顔を洗つて、大急ぎで着物を着たが、何だか非常に永く眠つた様な氣持がして、まだどうも本當に目が覺めない。其まゝ外に飛び出して好い心地で朝風に吹かれたが、フト氣がついて見ると、何とも斯とも云ふに云はれぬ不思議な事がある。昨夜寢た時は冬の初であつたのに、川端の木々の緑の色から察するに、今は確かに夏の初である。それでもチームス川は昨夜月の光で見たと同じやうに、朝日に輝いて流れて居る。私は此の驚きに頭がいよいよ變になつて、人が善くやつて居る様に、川の中流に小舟を漕出して一泳ぎ

(1)

(2)

して見たいと思つた。すると丁度すぐ前に船付場の石段がある。是れ幸ひと降りて行く。注文通りそこに幾つも小舟があつて、櫂を手にして客を待つらしい船頭が居る。彼は私に目禮して直ぐに其船を岸に寄せたので、私は何とも云はずに飛乗つた。

舟の漕ぎでる間に私は着物を脱いで、やゝ中流に來たと思ふころ、ザンブとばかり水中に飛入つた。一度沈んで二たび頭を水面に上げた時、私は川下に向つて鐵橋を打眺めた。すると驚くまい事か、水を掻く手もお留守になつてズブズブと沈みかけた程で、モウ悠々と泳いで居る氣もせず、直ぐに小舟に這ひあがつた。今度こそは目もハツキリと覺めた。船頭は『モウお上りですか。少し冷いでせうね、今朝は。直ぐに岸に着けますか、それとも少し朝飯前に川上の方にでも行つて見ますか』といふ。どうも船頭らしい言葉ではない。私は『マア少し此邊から景色を見たい』と云つたが、其實景色の變つたのに驚くと同じに、船頭の風采にも驚いた。今までは寢ぼけ目に善くも見なかつたが、彼は實に立派な若者で、一種愉快げな懐こらしい目なざしをして、骨

(3)

格は逞ましいが荒くれた所はなく、服装は古代服に改良を加へた様な、極めて單純な、極めて潔白なもので、どうしても然るべき紳士が慰みに舟を漕ぐものとしか思はれぬ。私は更に橋から掛けて東の方を見渡した。一夜の中にマア何といふ變化であらう。あの石鹼製造所の烟突も無くなつて居る。あの機械工場も見えない。それから鐵橋は總べてが石造に變つて、奇麗で堅固で、高くて大きくて、そして欄干の上には陳列店とでも云ひさうな恰好の美しい建物が立並んで見えて居る。マア何といふ立派な橋であらう！

『あの橋はイツ出來たのです』と私は舟の漕手に問うた。『ナニあまり古くもありません。二千三年に開通式があつたのです』と彼は答へた。

私は此の年數を聞いて、唇に錠をおろされたように、全く口をつぐんでしまつた。これは何か不思議な事があつたのに相違ない。滅多に口をきいては飛んでもない面倒な問題が起るかも知れない。そこで私は一向驚かない顔をして、さりげなく川の兩岸

(4)

を見渡した。兩岸には奇麗な家が一行に並んで居る。家は川から少し離れて、餘り大きくもなく高くもなく、大概は赤い煉瓦で、屋根は瓦葺になつて居る。そして其の住心地の善さそうな事と云つたら、恰も家が生きて居て住む人に馴れ親しむといふ様子である。家の前には川岸までズツト花園があつて、様々の花が今盛りに咲き匂つてゐる。家の後には大きな高い木が林を成して水に臨み、テームス川の此の部分に恰も森の中の湖水のように見せて居る。

やがて私は驚きのテレかくしに小舟を岸に着けさせた。岸に上つてからズボンのポケットを探りながら、何んだか紳士に對して失禮のような氣もしたけれど、船頭に向つて「幾ら」と聞いた。彼は當惑した様子で、私は言葉が分らないと云つた。私は少し赤面して「お尋ねしたのは失禮かも知れないが、私は旅の者で幾ら上げて善いものか見當が付かない」と云ひながら、銀貨を一握り彼れの前に差出した。銀貨は皆んな詰びてゐた。彼は猶當惑の顔付で、然しながら少しも怒つた様子はなく、頻りに其の

(5)

銀貨を眺めて居る。「成程、矢張り船頭だ。どれを取らうかと迷つてゐるらしい。ままよ、此の好い若者に少しぐらい餘計に拂つても惜しくはない。都合に依つたら案内にも備つてやらう」などと私は心中に考へた。

然るに若者は小首を傾けて、「ヤツトあなたの言葉の意味が分りました。私がおあなたの爲に働いたといふので、それであなたは何か私にやらうと云ふのでせう。そんな事が昔しあつたとは聞いてゐます。然しあなたの前ですが、随分面倒くさい習慣ですね。私が舟を漕ぐのは私の仕事です。それが爲に物を貰ふとはおかしいぢやありませんか。それに一人が呉れたら次の人も次の人も呉れるでせう。失禮な言分ですけれど、そんなに澤山記念の品を貰つたら第一置所がなくて困るでせう」と、サモおかしげに打笑つた。彼は氣違ひでは無いかと私は思つた。

處が彼は中々氣違ひらしくない。私の貨幣をば、何處ぞ材料の不足した博物館にやつたら善からう、ここの博物館には總ての時代のドツサリあるからと云ひ、又私の事

を、遠方からの旅人と見受るが、一時に此の土地の話をして分らないだらうから、少しづつ呑込むが善いと云ひ、終に自分が此の新世界の案内をしてやらうと云ひ出した。私は、それではあなたの仕事（か慰みか）を妨げはしないかと問うた。すると彼は、イヤ、それは丁度、自分の友達に機織をする者があつて、それが暫らく變つた仕事をしたいと云ふから、それに任せて置けば善い。其人はあなたと同じ様に、あの客館に住んでゐるからと云つて、客館（即ち私の舊宅）の前に立つて、銀の笛を腰のポケットから取出して吹き鳴らした。

笛の聲に應じて一人の若者が客館の中から出て來た。前の若者は後の若者をロバートと呼んで、自分で私を案内する事を話して、舟の事を彼に任せた。ロバートは前の若者をデックと呼んで、大喜びで承諾した。そしてロバートは私に向つて、「それにしてもマア一緒に朝飯を食へませう。あなたは昨夜、私の寝た跡で此の客館に來たのですね」と云つた。私は彼は云ふは面倒と、只頷いておいたが、此分では二人とも氣違

らしくもなし、今度は自分で自分が怪しくなつて來た。

二 客館の朝飯、四十二歳の婦人

客館と云ふのは赤煉瓦に亞鉛の屋根を葺いた、實に立派な建物である。私は二人について直ぐに中の食堂にはいつた。さまで廣くもないが、見まはすと自然に目の安まる様な氣がして、何ともいはれず居心地の善い部屋である。そして此の愉快な部屋の中に三人の若い婦人がそちこちと歩いてゐる。其の服装は極めて單純で、殊に夏の事だから、極々アツサリと涼しげに着なしてゐる。其の顔色は如何にも樂しそりに、如何にも親切そうに見える。そして其姿はシャンと引締つて弱々しい所がなく、如何にも健康らしく、如何にも活々と見える。顔は孰れも醜からず、殊に一人は美人である。彼等は私等の部屋にはいるのを見て、さざめきながら出迎へたが、少しも遠慮するケハイはなく、丁度長旅から歸つた兄弟でも迎へるように、三人ながら如何にも親しげに私の手を握つた。但し私の服装の奇妙なものには少し驚いた様子であつた。

機織のロバートが何か二言三言いふと、女達は頷いて、直ぐに我々の手をとつて、まめまめしく彼方のテーブルに導いた。それから一人は花園の方に走り出て、やがて美しい薔薇の花を一抱え取つて来て、清らかな硝子の鉢へそれを活けた。一人は又大きなキヤベツの葉に艶々した苺を盛りあげて持つて来た。

ロバートは女の肩を叩いて何やらからかふ。私とチツクとは直ぐ食事に取掛つた。食品は簡単だが、料理は極めて上手に出来てゐる。殊にパンは精良を極めて居る。食事の最中に、私はフト顔を上げて向ふの壁を見て驚いた。壁には金文字で左の如く題してある。

來客よ、隣人よ、此の客館は曾てハマスミス社會黨の講堂の在りし舊跡なり。紀念の爲に一杯の祝酒を酌め！ 一九六二年五月

(註。ハマスミス社會黨の講堂といふのは、著者モリスが自分の邸内に建築してゐたものである。その舊跡を自分で見たのだから驚いた筈である。)

私は此の一九六二年といふ日附を見て又今更に當惑した。私の驚いた顔付きが餘ほど變であつたと見えて、皆々暫らく無言であつたが、やがてロバートが私に向つて私の名を問うた。私は只『御客さん』と呼んで呉れと頼んだ。ロバートは更に私に向つて、何處から来たかと問うた。此時、舟漕のチツクは確にテーブルの下でロバートの足を蹴つてゐた。それでもロバートは一向遠慮する様子も無く、熱心に私の答を待つて居る。私はうつかり『ハマスミスから』と云はうとしたが、それでは又どんな面倒な話にならうも知れないと思つて、善い加減に調子を合はせて、『私は永の年月、外國に行つてゐたので、今では勝手の分らない事ばかりですが、是でも元は倫敦に生れた者です』などとやつた。それから私は問はれるままに倫敦の昔話を始めた。彼の美しい人などは殊にそれを面白がつて、何やら香の高い草花を持つた手を、後から私の肩に打掛けたりして、熱心に聞いて居た。

私がウツカリ様々の事を話して居る中、遠慮のない彼のロバートは、『では、あなたは

お幾つです』といふ間を起した。女達は顔を見合せて笑つてゐる。ヂツクは『そんな無様な事を聞くものではない』と其友をたしなめた。私も笑ひながら『ナニ私が女ではなし、年を聞かれたつて少しも困りはしません。私は是で五十六です』と眞直に答へた。

ヂツクは私の答を聞いて、前にローバトの無様を咎めたにも似ず、『エー』と云つて眼を見張つた。外の人々は只頻りに笑つてゐる。私もおかしくなつて笑ひだしたがサツパリ何の事やら分らない。で其譯を聞くと、例の美しい人が説明してくれた。『それはね、あなたが年よりもふけてお居でなさるといふ事ですよ。けれども其苦ですよ、あなたは永らく永らく旅をなさつたのですものね。そして其旅も開けない國々だとおつしやいましたでせう。不仕合せな人達の中に交つてゐると、大變に早くふけると云ひますからね。』

それから又此の美しい人は、少し顔を赤めて私に向ひ、『では、あなた私を幾つ位と

お思ひなさる』と問うた。『左様！斯うお見受け申した所がハタチ位でせうか』と私は答へた。女は吹出して、『マア飛んだ御世辭を聞かされますことね。正直に申しますが、私は是れで四十二になりますの。』

私は驚いて彼女を見つめた。彼女はクスクス笑つてゐる。其顔に苦勞の皺の一筋があるではなし、色艶なり肉付なり、どこまでも若々しく、殊に其の袖をまくりあげた、甲斐々々しい兩腕の美しさと云つたら無い。それが四十二歳の婦人とは、私は只呆れかへるより外はなかつた。

彼女は餘り私からシゲシゲ見つめられて、又少し顔を赤めたが、フト思ひついた様に、『オ、今朝はまだ用事があつた。では皆さん左様なら』と小走りに行つて了つた。跡でヂツクは私に向つて、『お客さん、今度は一つ何かあなたから此人に質問を出しては如何です』と云つた。『それではあなたの職業の事を伺ひたい』と私が云ふと、ロバートは次の如く語つた。『私はつまらない機織ですが、其外に少し印刷もやります。』

然し此頃では無暗に書物を拵へる事も止めて居るし、舊式の印刷術も追々廢止の傾きです。今度は少し數學をやつて見る積りです。それから私は又ちとばかり十九世紀末の歴史を調べて居るので、此の大變化の起つた以前の社會を明かに書いて見たいと思つて居ます。今に此のチツクの居ない時に、又ゆつくり昔のお話を伺ひたいと思ひます。此チツクなどは、私が手足の働きを十分にしないと云つて、冷かして仕様がなないので。それが今のふうですからね。私が讀んだ昔の本によると、昔は手足の働きのする者を賤んだやうですが、今ではそれがアベコベになつたのです。』

斯ういふ話の中に馬車の用意が出来た。馬車は極めて手輕な作りで、大丈夫な灰色の馬が付いてゐる。チツクと私とは直ぐにそれに乗り込んだ。ロバートと女達とは玄関まで送つて呉れた。

三 花園の様な田畑、ハマスミスの市場

我々はテームス川の岸を離れて直ぐにハマスミスの大通に出た。然るに昔し繁華の

町々の面影は少しもなく、廣々とした日あたりの善い牧場や、花園の様な田畑の中に、只だ一條の大道が通じて居る。家は處々に散ばつて、道傍にもあれば野の中にもある。赤い煉瓦作りもあれば木造の白壁もある。孰れも意匠に富んだ建方で、總てに野趣が溢れて居る。打眺めた所、何かにつけて十四世紀頃の古風な趣があるやうに思はれた。往來の人の姿を見るに、皆な晴々しく装つて、殊に婦人は驚くばかり美しい。私は覺えず感嘆の聲を續け發して、チツクの怪しみを受けた。猶ほ人々の顔を善く見るに、孰れも奥底なく打解けて、サモ愉快げな面持である。中には考へに沈んだやうな顔もあつたが、それとて決して苦勞心配の面影ではない。

馬車がだん／＼進んで今度は大きな建物の群がつた所に來た。建物は皆な餘り高くはないが、如何にも丈夫な構造で、そして如何にも奇麗に裝飾されてゐる。今まで見て來た野中の家に比べると、實に面白い反映をなしてゐる。それから町の通りには、數多の荷馬車があつて、其中には男、女、子供、皆な善く装つた健康らしい人々が乘

つて居て、麗しい田舎の農産物を、それぞれに積んで居る。

チツクは私の爲に説明した。これはハマスミス市場である。左の方に一際目立つ大きな建物は、あれは我々の冬向の會議所である。夏は川岸の野中に會合するのだから、別に會議所は入らない。又、右の方に見える、あの著るしい大建築は、あれは吾々の劇場である。

私はあたりを見廻しながら、「是れが皆な田舎の人達ですか。大變に綺麗な娘達が居るではありませんか」と問うた。チツクは私の言葉を解しない様子であるので、私は更に「少しも田舎者らしい人が居ないではありませんか」と云ひそへた。「田舎者とはどんな人の事を云ふのですか」とチツクは不思議な顔をした。「いえさ、貧乏人らしい者が一人も見えないといふ事です」と私は説明したが、チツクは矢張り私の言葉を解しない。「どうも私にはあなたの仰やる事が分らない。早く私の曾祖父の處に行きませう。曾祖父なら大概あなたの云ふ事を聞きわけるでせう」と云ひながら、馬に一鞭軽く當

てた。

四 ケンシントンの森、天幕生活、學校、教育

我々は多くの樹木の間を流れる綺麗な小川を越えた。暫らくすると又市場に來た。大きな建物も澤山ある。「ケレンシントンの市場」と案内者は私に告げた。

それを過ぎると、道の兩側に小い家のズツと並んだ處に來た。家は皆な木造の白壁で、並んだといふよりは寧ろ横長い一つの家で、前には綺麗なヒサシが付いてゐる。チツクの曰く「是れがケンシントンの町で、こゝには随分人が集つて來ます。あの森が面白いものですからね。」

我々は程なく美しい森の中に馬車を乗り入れた。日は漸く高く、暑さは漸く強くなつた今、此の森影の涼風に吹れる心地よさ。チツクは手綱を緩めて灰色の駒を静々と打たせた。

ケンシントンの森は繁つて居るが、さりとて物寂しい處では無い。我々は行く行く

多くの人を見た。中にも殊に多いのは子供で、六七歳から十六七歳までのが打交つて
 樂しげに遊んでゐる。或者は木の枝に天幕を張つて、其傍に焚火をして、其火の上に
 は土瓶が釣してある。ヂツクの話によれば、此の森の中のあちこちに家があるとの事。
 成ほど葉がぐれに二三軒見えてゐる。極少なさ家ばかりではあるが、森の景色に善く
 似合つて、如何にも樂しげに住みなしてゐる。

「餘ほど子供の多い家ばかりと見えますね」と私が子供の一群を指さしながら問へば、
 「ナニ、あれは此森の中の子供ばかりぢやありません。此の近在から集つて来て、夏の
 間、こゝで天幕生活をするのです。あゝすれば色々の事も覺えるし、又子供は成るべ
 く家の中に引込まぬが善いのですからな。尤も、森の中の天幕生活は子供ばかりでな
 く、大人も夏になれば遠い山の深林に出かける者が澤山あります」とヂツクは説明し
 た。

私は又「成程、斯うして遊んで置けば、秋になつて又學校に行くまでには、スツカ

リ氣分が新らしくなりますね」と云ふと、「エ、學校？學校とは何の事ですか」とヂツ
 クは不思議な顔をした。して見ると學校と云ふ者が此の社會には無いと見える。如何
 に世が變ればとて餘りの事であるので、私はモウ一言も物の云はれない様な心地がし
 た。然し黙つても居られないから、「學校とは教育を施す處を云ふのです」と答へた。
 すると、「教育？」と云つて又不思議な顔をした。「教育とは兒童に何かを教へる事だ
 す」と私が更に説明すると、「ハ、ア、それならば今の子供も色々教はりますよ。男の子
 も女の子でも皆な泳ぐ事は知つて居るし、小馬には乗るし、(それぞれ、今あそこに一
 人乗つてゐる。)それから料理もするし、草も刈るし、少しぐらいは大工もやるし、店
 番も大がい出来るし、随分色々な事を學びますよ」と彼は答へた。

私「でも心の教育をどうするのですか。」彼「何をするにも心は使ひますよ。然しあ
 なたの仰しやるのは多分本を読む事でせう。それなら譯のない事です。大概の子供は
 満四歳にもなれば、ツイ側にある本を見て直ぐに読む様になります。それから書く事

は今では餘り早くから獎勵しません。悪筆の癖が付くと困りますからね。軽便な印刷法のあるのに、何も皆が悪筆で書き立てるには及ばんぢやありませんか。そして部数の澤山いらぬ詩集だの歌集だのは能書の人の特に美しく書くのです。そりや實に善いものですよ。イヤ是れは飛んだ横道にはいりました。實は私がちよつと書家だものですからね。』

私は又元に戻つた。『子供が読み書きを覚えてから、いづれ何か教はるでせう。先づ外國語などはドウです』と問うた。彼曰く『勿論、直ぐ向ふ岸で話してゐる佛蘭西語などはジキに覺えます。それから大陸の州郡に廣く用ゐられて居る獨逸語などもジキに自由に使ひます。大人が皆知つてゐますからね。それに其の地方からの客人達が善く子供を連れて來ますからね。子供同志でジキに稽古が出來ます。』

『では歴史などは？』『歴史ですか。字が読めるやうになれば好きな者は勝手に讀みます。そしてドンナ本が善いかとか、或は又讀んでも分らないとかいふ場合には、誰れにで

も直ぐに聞く事が出来るぢやありませんか。』

『其外にはどんな事を學びますか。皆が歴史ばかりも學びますまい。』『固より。歴史なんぞ丸でやらぬ人が多いのです。私の曾祖父が善くこんな事を云つてゐました。世の中に混雜や騒動の多い時に、兎かく人は歴史を氣にするものだ。それに今ぢや世の中は平和ですし、人は大概實際の事物の研究や理論の學問ばかりヤツて居ます。例へばあのロバートなどは數學に一心になつて居ます。』

『でも子供がそんな事ばかり學ぶのですか。』

『子供といつても色々ですが、今では大抵十六歳まで位は、話の本か何ぞの外に餘り讀書をやりません。一體に餘り早く本蟲になる事は獎勵しないのです。子供は總べて大人の眞似をするものですから、大人が家屋の建築とか、道路の修繕とか、庭作りとかいふ様な仕事を面白がつてやつて居るのを見ると、そんなに本讀が澤山出來はしません。』

「私はモウ何と云つていゝか言葉が出なかつた。馬車が段々進んで倫敦の中央に近づくに連れて、そこがどの様に變化して居るだらうかと、只そればかり氣にして居たが、チツクは猶ほ語り續けた。

「尤も、學者も面白いもので、入用も無い仕事に獨り喜んで骨を折つて、そして多くは謙遜で、親切で、人が好くて、自分の知つてゐる事は誰にでも教へたがつて、私はアノ人達が大好きですよ。」

「私は餘りの話しに又一つ質問を試みようと思つた時、馬車は或坂の上に来て、新しい景色が我々の眼前に展開した。私は忽ちにして見覚えのある大きな建物を認めた。『エストミンスター寺院』と覺えずも叫んだ。

「あれは今何になつて居ます。』別に何と云ふ事はありません。百年前の大掃除の時、あの野蠻な紀念物や、馬鹿や悪黨の石碑などを一切取拂つて、今では只だ綺麗な處になつて居るばかりです。」

馬車は又少し進んだ。私は又右手の方に見覚えのある建物を認めた。『ヤア、あれは國會議事堂ですね。今でもアレを使ふのですか。』

チツクは引くり返る程に吹出して笑つた後、『私は昔の人があそこでやつて居たアノ不思議な賭博の事を書いた本を、曾祖父に勧められて讀んだ事はありますが、それを今使ふかとは？イヤ使ひますとも、市場の代りにも使ふし、肥料の倉庫にも使ひます。丁度川岸にあるので、そんな事には持つて來いです。』

五 昔の倫敦の面影、標草とパイプ

話の中に馬車は又森を過ぎて、綺麗な家の建ち並んだ町に來た。賣買と云ふことは此の社會には無いらしいが、それにしてもこゝは店に違ひない。美しく仕構へた家の表に様々の器物が陳列してある。それを立止まつて眺めて居る人もある。店の中にはいつて行く人もある。小包を提げて出て來る人もある。道の兩側には綺麗な廂があつて、徒歩の人々は其下を歩いて居る。そして町の中央とも云ふべき彼方には、例の如

き大建築が聳えて居る。

『こゝは即ちピカチリーで、外とは少し違つた市場です。是等の家の二階は皆んな客館で、こゝは近在の人の群集する所ですから、其爲に設けてあるのです。私などは餘り好まないが、世間には雑踏を好む人も澤山ありますからね』とチツクは説明した。

成程、今でもこゝが群集の中心になるとは、流石に昔の倫敦の面影を残して居る。

などと思ひながら、私はチツクに頼んで馬の歩みを緩かにして貰つて、美しい店の様を一心に眺めて居た。『こゝは議事堂の市場が近くて、あそこにはキャベツだの、大根だの、麥酒だの、何だのと、そんな物が置いてあるので、こゝには細々とした美しい物ばかりが置いてあるのです。何ぞあなた欲しい物はありませんか』とチツクは云つて呉れた。

私は第一に着物の事が氣になつて居る。それで何心なくポケットに手を入れて見る

と、サアしまつた。ポケットの中には古鍵が二つ残つて居るばかりで、金貨や銀貨は先程ハマスミスの客館で、あの美人のアンニーに出して見せて、其まゝ置忘れて来たのである。それで私の顔色が五割方も下つたと見えて、チツクは怪んで私の顔を見た。私が『スツカリ忘れて来た』と云ふと、『忘れたつて善いぢやありませんか。何でも此の市場にありますから』とチツクは云つた。私はそれでヤツト此の社會に金錢の入りぬ事を思ひ出した。それから私は着物の事をチツクに話すと、チツクは曾祖父に其の昔風の姿を見せたいから、其儘で居て呉れと云ふ。そして外に何か欲しい物はないかと云ふから、實は煙草がのみたいと云ふと、『ウン成程、自分がのまないものだからツイ氣が付かずに居た。それなら丁度こゝにある』と云つて馬を止めた。

二人が馬車から降りると。チツクはそこにブラ〜と歩いてゐる美しい娘を呼びかけて、『モシ〜、あなたチヨットの間、此馬を見て居て下さいませんか』と頼んだ。娘はニコ〜しながら立寄つて、馬の頭を叩いて居た。二人は店の中にはいつた。中

には帳場臺があつて、其うしろに兄弟らしい十一二の少年と十三四の少女とが、何か本を讀んで居る。「今日は！」とチツクは此の小さい隣人に挨拶して、「此方が煙草とパイプを欲しいと仰しやるが、こゝにありますか」と尋ねた。

『ハイあります』と少女は爽かに答へた。少年は顔をあげて不思議さうに私の姿を見て居た。「煙草は何が宜しう御座いますか」と少女は更に云つた。「ラタキヤ」と私は答へた。やがて少女は綺麗な箱にラタキヤの葉巻を一パイ盛つて帳場臺の上に差し出した。

私はどれだけ取つて善いのかと少し躊躇して居ると、「どうぞドツサリお持ちなさい。此品の無い處に入らつしやると御困りなさいますから」と少女は中々如才なく云つて呉れる。私はまごつきながらハンケチを取出して包まうとすると、「アレ、そんな物にお包みなさらないでも、私がモツト善い物をお上げませう」と云ひながら、少女は奥の方に立つて行つた。彼は其ついでに何やら弟の耳に囁いたが、弟は頷きながら直

ぐに立つて外に出た。

やがて少女は綺麗に縫をした袋を持つて来て、「是れをお持ちなさいまし」と云ひながら葉巻を一パイそれに詰めて、「それからパイプですね。それも私が善いの見たとてあげませう」と云ひながら又立つて奥に行つたが、何の木か知らぬが極めて精巧な彫刻をした、日本細工に似た様な物を持つて来た。「こんな立派な物は私に過ぎる。それに落しでもすると悪いから」と私が云ふと、少女は不思議な顔をして、「あなたコンナのはお嫌ひですか」と云ふ。「イヤ好は大好だけれど」と云ふと、「それなら善いぢやありませんか。お落しなすつたら、誰か拾つて使ひませう。そしてあなたは又新しいのをお使ひなさいましな」と云ふ。

私は其パイプを手を取つて打眺めながら、又してもウツカリして「是れで幾らです」と口を滑らした。チツクは忽ち私の肩を叩いた。見ると其眼には一種の笑ひを帯びて居る。私はヒヤリとして口をつぐんだ。

少女は何にも分らぬと見えて只黙つて居る。私は終に「有がたう」と云つてパイプをポケットに収めたが、こんな事をして跡で警察に引張られはしないかと云ふ様な気がした。

そこに彼の少年が返つて来た。手には細長いフラスコと綺麗なコップを二つ持つてゐる。少女は更に笑みを浮べて、「珍しいお客様に来て戴いたのですから、是れを一つ上げたいと思ひます。どうぞ召上つて下さいまし」と云ふ。少年は其フラスコから葡萄酒を注いで呉れた。丁度喉は乾いて居るし、私は一息にグツと飲んだ。イヤ昔も今も葡萄酒の香りに變りは無い。

それから禮を云ふて外に出ると、夢の中の景色が變つた様に、彼の美しい娘は消え失せて、背の高い老人が我々の馬の番をして居る。老人の言葉に依れば、彼の娘は外に用があつて永く待つて居られないから、それで自分が代つたとの事。そして老人は我々の失望した顔色を見て妙に笑つた。我々も只だ笑ふより外は無かつた。

六 怠惰の遺傳者、道路の修繕

彼の老人も我々と同じ方向に行くと言ふので、三人一しよに馬車に乗つた。馬車の上の話に、昔は怠惰とか、ナマケルとか云ふ遺傳病があつたそうで、それは無理に人を追使つて労働をさせた結果で、後に其の怠惰病を治療するに大變骨が折れたと醫學の書物に書いてあるとの事。そして二人はサモをかしげに打笑つたが、私には労働を嫌ふのがナゼをかしいか十分呑込めなかつた。

兎かくする内、馬車はピカチリを離れて、廣い園の間に別荘の様な家の澤山ある處に來た。木々の梢には果物が累累と實のつて、小鳥が其間に轉つて居る。娘や子供は手に手に果物を盛つた籠を提げて、幾度か我々の馬車に近づいて、取れよ取れよと勧めて呉れた。こゝは即ち昔トラファルガルの廣場と呼ばれて、よく示威運動などのあつた處である。それから私は、例のパイプで好物のラタキヤを燻らしながら、今の社會に監獄の無い話など彼の老人から聞かされて、又新しくなりゆく前面の景色を、

飽くこと知らずに馬車の上から眺めて居た。

フト製造所らしい建物が目に付いたので、あれは何ですかとチツクに問へば、あれは我々の組合工場だといふ。いづれ何かの原動力を使ふのであらうと問へば、動力は銘々の家でも使はれるから其爲に組合ふ必要はない。組合工場では大勢集つてするのが便利だと云ふ手仕事をやるので、例へば瀬戸物を焼いたり、硝子を拵へたりするのだといふ。少しも煙が見えないかと問へば、煙なんぞ見える筈が無い。あの中は實に奇麗なもので、仕事は實に愉快極まるものだといふ。

それから又少し行くと、道路の修繕をやつて居るので、暫らく馬車の進みを止めた。其の修繕をして居る一群の人人は、いづれも屈強な若者で、恰も大學あたりのボート漕の連中の様に見えて居る。彼等は皆な上衣を脱いで道傍に積み、そこには六歳ばかりの子供が犬と一しよに番をして居る。そして其側には大きな籠があつて、菓物だの葡萄だのが入れてある。それから五六人の若い女が面白そうに其の人人々の働きぶりを

見物して居る。働き手は皆な活潑に振舞ひながら、絶えず女達と話したり笑つたりして、少しも苦勞を覺えない様子である。其中、或る一人が我々の馬車を見つけて、『オイ、皆少し止めた止めた。そしてアノ馬車を通してあげるのだ』と叫んだ。彼等は一時に手を休めて、或者は會釋をしながら馬の口を取つて、掘りかへした道の上を、安々と通して呉れた。跡には直ぐに又鶴嘴の音が聞えて居た。

『是れでは丸で遊び事の様ですね』と私が云ふと、『愉快に働けば仕事は皆な遊び事の様なものですよ』とチツクは云つた。

七 博物館、百五歳の老翁、男女の關係

それから又暫らく行つて、彼の老入は我々に別れを告げて馬車を下りた。其の後ろ姿が餘り元氣らしくて、私が昔し見なれた多くの老人の姿とは違ふので、『あれである人は幾つ位でせう』とチツクに問ふと、『左様さ、九十位なものだらう』と彼は答へた。世の様が變れば人も長生をするものだと思は深く感心した。

又暫らく行つて博物館の前に来た。是ばかりは昔ながらの其の建築が残つて居る。我々は馬車を止めてこゝに下りた。チツクの曾祖父さんのハモンド翁はこゝに居るのである。彼は元、此の博物館の番人を務めた人で、今でも此中に住んで居るのである。博物館には多くの見物人が集つてゐて、皆な不思議さうに私の姿を眺めたが、さりとして人をさげすむ様子はなく、私と目を見合せては、皆ニコニコして私を迎へる心持を示してくれた。

私は昔馴染の此の建築を懐かしく思つて見まはして居ると、チツクは頻りに其の見苦しさを罵りながら、是も一時は壊してしまふ苦であつたが、記念の爲に僅かに残される事になつたのだと説明した。

チツクは又、自分は外に少し話をせねばならぬ人もあるから、其間ゆつくり曾祖父と話して呉れと云ひながら、私をハモンド翁の室に導いた。室の一隅の窓の側の机の前の、大きな腕掛椅子に凭れて居る小さな老翁がある。それが即ち當年百五歳のハモ

ンド翁であつた。翁は其の老體にも似ず、大きな強い聲で、「オ、善く来たチツク、丁度クララも来て居る。」

「クララが？」と云つた儘でチツクは顔を赤くしたが、其間に翁は私を認めて、「ヤアお客さん、善く来て下さつた。あなたは旅のお方と見えるが、珍らしい話の種を持つ

て此の老人を喜ばせに来て下さつたのでせう。サア〜こちらにお掛けなさい。」
 私が席に着くと、翁は更に、「あなた、どちらからお出でなかつた」と問ふ。私は暖昧に「私も昔は此の英吉利に住んだ者で、今度久しぶりに歸つて来て、昨夜はハマスミスの客館に宿りました」とごまかした。翁は私の答に少し不足の様子であつたが、やがて其の梅干の様な顔に極めて優しい笑みを浮べて、「ウン成程々々。ドコから来たさつたにせよ、こゝはあなたの内も同様だ。どうぞ遠慮なしに逗留して下さい」と世にも嬉しい言葉である。チツクは先程から頻りに何か考へ込んで居る様子だつたが、此時漸く口を開いて、「お爺さん、此方は餘り久しぶりで、此國の風俗が全く分らないと

仰しやる。そこであなたなら此の二百年來の事を善く御存じだから、色々御話しが合ふかと思つて、それで一緒に來たのです」と私を紹介した。そこに入口の戸が開いて、美しい若い婦人の姿が見えた。婦人はツツカと室に入つて、チツクを見て急に立止り、眞赤になつて俯向いた。チツクは靜かに婦人を見詰めて、半ば其手を差しだしたが、其顔には堪へぬ思が浮んで居た。

ハモンド翁は此様を見てほゝゑみながら、「チツクや、クララや、私達の様な年寄が居ては邪魔だから、あちらの部屋で二人ユツクリ話すが善い」と追立てる様に云つた。クララはチツクの手を取りながら二人無言の儘で出て行つた。

二人が出て行つた跡で、ハモンド翁は私に向ひ、「私は大の話好でなア。お客さん何でも遠慮なく尋ねて下さい」と催促する。私は、「私のお尋ねする事は、天から落ちて來た人にでも話をするやうな積りで聞いて下さい」と前置をして、先づ「あの婦人はチツクさんと結婚をなさるのですか」と問うて見た。

翁曰く「左様、元一度結婚して居たのですが、多分又そうなるのでせうよ。」

「へえ」と私は其意を解しかねて居ると、「それが斯う云ふ譯です」と翁は次の如く語つた。「あの二人は最初結婚して二年ばかり一緒に居ました。然るにクララがどうした事か、其中に自分の愛が他の人に移つたと感じた。そこで其儘チツクと別れてしまつた。チツクこそ可愛そくに、外に愛する婦人も出来なかつた。然しそれが永くは續かないで、一年ばかりしてクララは私の處にやつて來て、此頃チツクはどうして居るかと聞いた。私はハハアと思つて「可愛そくに、チツクはそれから影りきつて、兎角體も勝れない様だ」と云つてやりました。體の事だけは嘘でしたけれど。跡は御察しで分りませう。」

(33)

「へえ、して二人の間に子供は無いのですか」と私は問うた。「ありますとも。」翁は答へた。「二人ありますよ。そして私の娘の處に居ますよ。クララも大概はそこに居たのです。私は此仲は屹度元に收まると見て居たものですからね、成るべくクララを引止

めて居たのです。』

『成程、裁判所に持出さぬ様にして、籍も其儘にしてあつたのですね。』「イヤ、あなたまだソナナ事を考へてお居ですか。昔し離婚裁判所と云ふ者があつたとは聞いてゐるが、そんなものが今の世に残つてゐる筈がない。昔の離婚の訴訟といふのは、皆な財産の争ひだつたのでせう。如何にあなたが天から落ちて來たにせよ、チョツト見た文でも此の社會に私有財産の争ひの起り様の無い事は分りませう。』

成程、それは私にも分つた。

などと云ふ事は、今では無意味な言葉

になつてゐるのだ。

翁は猶續けて曰く、『既に財産の争ひが無いとすれば、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、外に何があります。愛情の契約履行を裁判所が責めて見た所で、それが何になります。此の二百年來、男女の關係も全く一變しました。そりやア今だつて男女間に色々不幸な事が無いとは云へません。然し、生活の爲や、地位の爲や、子供の爲やで、其の不

幸の上塗をするやうな愚かな事はモウ決してありません。』

私は何とも言葉を挟むことが出来なかつた。翁は更に又續けて曰く、『生涯を共にすると誓ひながら、早くも其愛の失せる事もあり、人間の美しさと人間の親切とに對して、人間以上の完全を想像して、忽ち失望する事もあり、又或は美にして且賢なる人を得んと欲して、終に得られざる不平もあり、何れにしても總ての苦痛を全く拭ひ去る法は無いが、然し又、我々の今の世には色戀以外に多くの慰めも備はつてゐるのだから、左までに其の苦痛を重くも思ひません。それに我々は昔の人より長生もするし男も女もそんなに早く老衰するでは無し、兎かくする中に其の苦痛を振りすて、氣を變へるのが勇ましいとしてあります。何にせよ我々は、昔の商賣的の戀愛は全く棄てて居るのです。』

私は是に至つて此の社會に於ける婦人の地位を問うた。翁笑つて曰く、『成程、昔し婦人問題とか云つて喧ましい事がありましたね。然し今では男が女を壓制する事も出

来ず、女は女の最も善くする事、或は最も好む事をするだけです。」

『では婦人は立法権をも有して居りますか。』

『立法権！イヤ其事は餘り混雑しますから跡に廻しませう。』

『それではモ一つ外の事を聞きますが、今朝私がハマスミスの客館で見た所に依ると婦人達が男の人々の給仕をして居ましたが。』

『ハア、そりや給仕もしますさ。あなたは臺所仕事や其外家内の雑務を尊敬すべき事で無い様にお思ひでせうが、家持を善くして家内の人々に喜ばれるのは、婦人の身にとつては大變な楽しみではありませんか。それに美しい女に色々と世話して貰ふのは誰だとして嬉しいではありませんか。あなたでも覚えがあらう。私でさへ忘れはしないもの。』

翁は其の梅干のやうな顔を頷して打笑つた。そして又曰く、『昔しの金持とか、身分のある人とか云つた者は、現在自分で日々食つて居るものを、どうして拵へたか丸で

知らなかつたとは、随分おかしな話ぢやありませんか。そしてそれを知らないのが上品だと思つて居たとは、何と云ふ馬鹿々々しい事だせう。私なんぞは是れで學者だとか何だとか云はれるが、それでも料理なんぞは心得たものですよ。』

私は更に話頭を轉じて、『昔の上流社會の婦人は兎かく子を持つ事を嫌つて居ましたか』と云ひかけると、翁は忽ち又嚴肅な態度に返つて、『左様々々、そんな馬鹿な考へが一時ありましたな。我々は云ふ迄もなく、深く母性を尊敬するのです。そして母の苦痛は即ち愛と化して報はれるではありませんか。尤も今の社會では、其の苦痛の外には母の身に何の煩ひも無く、子供の行末に就いても何一つ心配は無いのです。勿論其の子供の生立に就いての氣遣が無いでは無いが、それは萬止むを得ない事で、育てるに困るとか、教育する事が出来ないとか、そんな心配は一切無用です。それで普通の健康な婦人は、男子の友として愛せられ、更に子持として尊敬される事を望まない者はありません。』

『成程、如何にも御尤も。』私は此外に言葉が無かつた。翁又曰く、『社會が斯う云ふ風に自由になつた結果は、あなたがチヨイと見ても分りませう。人の顔が(女は殊に)昔とは違つてをりませう。』

私は實に今朝から此事を感じて居た。『全く御言葉の通り、こんな柔和な、上品な、美しい人種は見た事がありません。』

八 梶白の如き昔の教育、新社會の家庭生活

ハモンド翁は頻りに椅子をゆすぶりながら、『さあモツト質問をお出しなさい』と催促する。私は先程ヂツクから聞いた教育の事がまだどうも十分胸に落ちないので、更に其事を翁に質問した。翁の快舌は忽ち動きだして、盛んに古への教育を罵倒した。

曰く『古への教育と云ふのは、生活の道を得させんが爲に、少しばかりの智識を無理に詰込んだので、丁度食ひたくもない物を丸呑にさせた様なものですな。子供の體質にも性質にもお構ひなしで、何歳かになれば一樣に學校にブチこんで、そしてお極

りの學科で一樣に押しつける。それぢや全く心身の發育といふ事を無視した譯ぢやありませんか。そんな梶白の中に挟まれて、無疵で出て來られる譯はないのです。只非常に強い反抗心のある者だけが、纒かに壓迫を免かれますが、幸ひにいつの時代の子供にも其の反抗心が強かつたので、終に今日の進歩を見たのです。』

翁は更に一轉して曰く、『之と云ふも實は皆な貧乏の結果で、
の十九世紀の

社會の貧乏では、眞の教育の出來なかつたのも無理は無いのです。年を取つては生活に追はれ、貧乏に迫はれて、到底智識を得る道は無いので、如何に苦しくとも子供の中に少しばかりの智識を注ぎ込む事にして、無駄とは知りつゝ譯も分らぬ講釋を聞かせて置くといふのが、當時の謂はゆる教育の主意で、それも實に止むを得ん次第であつたのでせう。然し今日では何もそんなに急ぐ事はなし、氣の向き次第、學問はいつでも出来る事になつて居るのだから、總て自然の發育に任せてあるのです。』

『然し、それでは數學なんぞ誰も厭がつてヤラヌと云ふ様な事になりはしませんか』

と私は不審を打つた。翁曰く「ハハア、あなたは太夫ん數學を強いられた事があると見えますな。それで何ですか、強いて其の數學を教へられた効能がありますか。今日幾らか其數學を覚えてお居てですか。」

私はハタと行詰つて「いえ、それは、實は少しも覚えては居ませんが」と云つたきり、再び教育の事を問ふ勇氣は出なかつた。次に私は此の新社會の家庭生活の有様を質問した。翁曰く「我々は只我々の好きな通りに生活して居るのですが、それで自然、誰か氣の合つた人々と一緒に住む事になつて居ますよ。昔しフリーエーなどの考へた共同家屋と云ふ様なものは、あれは只貧乏から逃れた避難所で、貧乏といふ事のない社會では、そんな生活法は想像が出来ません。それで今では、銘々別々に家庭を作るのが通例で、多少家風の差別はあるが、それにも拘はらず、其の門戸はいつも自由に開放されてゐるので、他人の家風に從つて満足する様な氣の善い人は、場合次第で誰の家にも同居する事になつて居るのです。」

九 貧民窟の大掃除、都會の村落化

家庭の事はそれ丈にして、次に私は此の大都會倫敦の變遷を問うた。翁曰く、「昔は此家の前から馬に乗つて、東に向つて一時間半ばかりダクを打たせても、まだ倫敦の市中を離れぬほどダ、びろい市中であつたが、そして其の廣い市中の大部分は謂ゆる貧民窟で、其の貧民窟は罪も無い男女の苦患の場所、生みてはナブリ殺し、生みてはナブリ殺しの人間の芥棄場で、それを普通日常生活として何とも思はぬ程の墮落を極めて居たが……」

「イヤそれは善く知つて居ますが」と私は堪らなくなつて翁の言葉を遮り、「其町が今でも少しは残つて居りますか」と、今の事に話を轉じた。

(41) 翁曰く「少しも。只だ其の記憶を喚起するのは、年々一度、五月に催される貧民窟大掃除の記念祭で、其日には昔し貧民窟の中心であつた其の土地で、音楽やら、舞踏やら、面白い遊戯、楽しい會食、あらゆる歡樂が演じられる。そして綺麗な娘達が昔の

變革の歌を歌ふ事が習慣になつてゐるが、其の娘達は歌の意味など少しも分らずに、只だ面白そうに歌つてゐるのです。』

それから私が猶ハモンド翁に聞き得た所に依ると、此の貧民窟大掃除の時、昔の謂ゆる倫敦の商業區域だけは壊さずに残して置いて、貧民窟から引揚げて来た人々を暫らくそこに住ませ、跡で追々にそれを建て直して、楽しい人間の往居になつたが、其の因縁の爲に今でも其邊は人家が甚だ稠密であるとの事。又、十九世紀に建設せられた倫敦ドツクだけは今でも用ゐられてゐるが、今では世界の市場などと自慢をするでは無し、總べての事に中央集權を排斥するので、船舶の出入は昔のように頻繁では無いとの事。

次に私は又、他の大都會の事を翁に問うた。翁曰く、『昔し商工業の中心など、誇つて居た處は、今では皆んな消え失せてしまひましたよ。元來それらの都會は只だ賭博場であつたのですからな。それに機械力の使用法に大變化は起るし、全く存在の理由

が無くなつたのです。』

私は更に轉じて都會と田舎との關係を翁に問うた。翁曰く、『十九世紀の終には、地方の村落は殆んど破壊されて、家は傾き、木は切られ、仕事は少なく、賃銀は下り、産物は悉く中央都會に吸収されて居たのですね。それがどうです。此あたりは殊に變化が速かであつたのですが、丁度野獸が餌を追ふ様に、人民は群を成して自由の村落に溢れこんだのです。ツマリ都會が村落を襲うて侵入したのです。そして昔の世の侵入軍と同じ様に、其の周圍に感化されて、素朴な田舎人となつたのです。そして其の人々が多數の勢ひを以て更に都會人を感化したので、今では都會と田舎との差別が段々に少なくなつて居ます。勿論、最初は色々な失策や混雜もありましたし、まだ二十世紀の前半には、昔の考へが残つて居て、詰らぬ心配や苦情もありましたが、それも長い間には全く消えうせて、今ではあなたが御覽の通り、實に我々は幸福に暮して居るのです。』

翁は暫らく考へに沈んで後、更に曰く、「此の英國は最初山林曠野の間に、封建の侯伯達が處々に城塞を築き立て、其の城下に農工商が集つて居た。それが次には、不潔な大工場と賭博場との周圍に哀れな貧乏人の群集する國となつた。それが今では國內一圓の花園になつて、其間にあちこち人の住居があり、小屋があり、工場があり、工場があり、皆な綺麗な、清潔な、居心地の善い場所となつて居るのです。」

私は漸く少し此の新社會の組立が呑み込めた。

十〇〇〇無國會、戦争と労働者

「扱今度は一つ無趣味な事をお尋ねしますが、民主政治が終に勝を制しましたか、それとも或る人々の豫言したように、民主政治の終局として獨裁政治に歸して居りますか。」

私の此問に對して、ハモンド翁は吹き出して笑つた。そして曰く、「お客さん、あなたに驚くかも知れぬが、今では〇〇〇〇、陸軍だの、海軍だの、〇〇〇〇、そんなも

のは一切ありませんよ。そして人民全體が國會になつて居るのです。」

翁はそれから昔の國會を罵つて、「あれは一方には、上流社會の利益の侵害せられぬやうに見張をする番人で、又一方には、人民を胡麻化してサモ政治に參與して居る様に想はせる目隠しであつた」と云ひ、「昔し神聖だ神聖だと稱されて居た〇〇〇といふものは、只だ或物品を片手に握んで居て、そして隣人に向つて、是れは己れの物だから貴様達取る事はならぬぞと叫ぶ様なものだ」と云ひ、そこで此の〇〇〇〇〇〇無くなつた今の社會に、〇〇〇〇と云ふ者の必要がドウしてあるか」と結論した。翁は更に又一步を進めて曰く、「して見れば貧乏人に對して金持を保護し、弱い者に對して強い者を保護するより外に〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇無の答でせう。」

私「でも外國の敵を防がなければならぬと、ヨク昔は云ひましたが。」

翁「ハ、ア、それでは英國政府が英國人民の爲に佛國の敵を防ぐと云ふ譯ですな。」

私「そうです、そう云つたものです。」

翁『○○○金持といふ階級を保護して、○○○○○○○○を養はしむればこそ、そんな者も出来るのですが、今の社會にそんな者の出来様筈がありません。』

私『そうすると、民法といふ者は全く廢止になりましたか。』

翁『自然消滅してしまひましたよ。民事の○○○○○○○○の保護の爲に置かれたもので、○○○○○廢止になると同時に、民法と云ふものも無くなるし、民法が製造した罪と云ふ者も無くなりました。』

私『成程、それは御尤もです。然し刑法の必要はありません。』

翁『イヤ、○○○○○○○○。マア善く考へて御覽なさい。刑事上の罪と云ふのも多くは○○○○○の結果ですよ。少數の人が○○○○○○○、人間自然の欲望を一般の人に満足させぬから、それで刑事上の罪も起つたのですよ。尤も、其外に色情から起る罪もありましたが、それも善く善く考へて見ると、大抵は婦人を男子の私有物と見てゐたからの事で、婦人の貞操を破つたとか、私通したとか云つたのも、皆な○○○

産の法から出た考へですよ。』

私『そうすると、今ではモウ暴行といふやうな事は一切無いのですか。』

翁『イヤ、それは無いとは云はれません。血が熱すれば人を打ちもする。又打返しもある。時としては人を殺す事も無いではありません。然し打たれた人も跡になつて冷やかに考へて見れば、勿論打つた人を恕する氣になるし、又殺された場合にしても其の殺された人が、社會に對して復讐を要求すると云ふほど下劣な心を持つて居たとは考へられないし、又殺した人を殺して見ても、それが爲に先に殺された人が生返るでは無し、其の不幸が償はれるでは無し……』

私『然し御老人、何か刑罰が無くては、社會の平和が保たれますまい。』

翁『サアそこですテ。昔の人は刑罰々と利口ぶつて云つたものだが、其實あんな○○なものはありませんね。あれは只、上流社會の○○○の發現です。昔の上流社會は丁度○○○○○の中に住んで居るやうなものだつたので、それでビク／＼して怖

がつてゐたのです。然るに今では我々皆な朋友の間に住んでゐるので、刑罰などの必要はありません。若し偶々起る所の人殺しを怖がつて、それに對して刑罰といふ人殺しを敢てするならば、此の社會は實に獐猛なる憶病者の寄合と云はねばなりません。い。ドウですお客さん。』

私『如何にも、そう承つはて見れば一言もありません。然し幾度も幾度も亂暴を働く者があつたらドウなさいませう。』

翁『病氣か狂氣かなら止むを得ず監禁もせねばなりません。そうでない限りは悔悟と云ふ事がありますからな。』

私『それ丈で澤山でせうか。』

翁『澤山ですとも。よし澤山でないにしても、其外に仕方がありますまい。若し我が其人に苦痛を興へるならば、其人の悲みは怒りと變じ、折角悔悟の出かけて居る所を無理に吞込ませて、反抗心を起させる事になりませう。既に刑罰に服すれば、そ

れで前科は消えた譯ですから、今度は大威張で又悪い事をヤル様になりませう。』

私『成程、民法もなく刑罰も不用になつたといふ所は善く分りました。然し物品交換に就ての規定などは如何なものですか。』

翁『ウン市場の規則は在りますよ。然しそれは只だ習慣に従つた丈の者で、誰れも其れに違背する者などはありませんから、別に法律と云ふ程の者ぢやありませんよ。』

十二 政治

私『それでは政治の事はどんな風になつて居りますか。』翁(笑ひながら)『英國中で政治と云ふ意味を解して居るものは私一人でせうよ。然し其答は極めて簡單です、今は政治と云ふものは殆んどありません。若しあなたが他日私の話を書いて本にでもなさるなら、只「政治」と云ふ題目だけの一章にしてお置きなさい。』

十三 〇〇〇〇〇〇、多数決の事

私『では外國との關係は如何ですか。』

翁『外國！ハ、ア分りました。お客さん、今では〇〇〇〇〇〇の形は消え失せましたよ。』

私『然しそれでは〇〇〇〇の差別が無くて、世界があまり單調になりすぎはしませんか。』

翁『馬鹿な事を。海を越えて大陸に往つて御覽なさい。風景なり、建築なり、食物なり、遊戯なり、到る處に差別があります。男女とも其の容貌の異なるように其の趣味が違つて居るので、服装などは昔よりも餘計に差別があります。昔の様な、人工的な、器械的な團體が〇〇と稱して、愚かな嫉妬心を燃し立て、あれが何の望ましい差別ですか。』

それから翁は猶、既に〇〇の〇〇消滅した今の世界に於いては、遠方の人種と人種との間に紛議などの起る場合の極めて少い事を説き、又一小社會の間に於いても、或る事件に對する意見の相違の爲に固定した政黨などの出来る筈の無い事を説き、話は

轉じて多數決の事に移つた。

翁曰く『例へばこゝに或地方の一社會で新しく公會堂を建てるとか、不便利な家屋を取拂ふとか、見苦しい鐵橋を石造に改めるとか云ふ場合には、住民會に於いて住民の一人が其案を提出する。一人も異議が無ければ其儘に可決する。又一人も賛成者が無ければ其儘で暫らく否決する。若し又、多少の異議がある場合には、兎にかく次の會まで延す。次の會までには賛成反對の意見が世上に交換される。時としては印刷して配布される、そこで次の會には又一應の討論があつて、終に手を擧げて賛否を決する。それで若し賛否の差が甚だ少い時には、又次の會まで延ばす。若し又、其差が可なり多い時には、小數者に讓歩を求める。其の場合、小數者は大抵讓歩を甘んずるが若し讓歩せぬ時には更に三度目の討論を行ふ。それでも猶ほ少數意見が餘り勢力を増さぬ時には、少數者は直ちに讓歩する。尤も規則としては、少數者がまだ其上の討論を要求し得る事になつてゐるが、其の規則の用ゐられた例が無いので、殆んどモウ忘

れられてゐる。』

私『それで若し二度目の會に贊否の差が猶ほ甚だ少い時には？』

翁『其時には多數者の方が暫く現状維持に讓歩する規則です。然し多くの場合に、少數者の方が其の規則の實行を要求せずに、大抵多數者に讓歩する習慣です。』

翁は語り終つて微笑しながら、『サアもつと質問がありませんか』と私を促した。

十四 労働の報酬、文明人の偽善と残忍

『モウ大方チツクさんとクラ、さんが見えませうから』と、私は質問を遠慮したが、翁は『ナニ構ふものか、二人が來たら待たせて置けば善いと云ふ。そこで私は又翁に問うた。』

私『労働に報酬が無くて十分に人を働かせる事が出来ますか。』翁『労働の報酬は即ち我々の生活ちやありませんか。それでマダ不足ですか。』

私『でも特別な善い仕事に對しては、何か特別な報酬が無くては……』

翁『其の報酬は澤山ありますよ。現に労働の結果として何かそこに物が出来るちやありませんか。昔の言葉で言へば、それが即ち神の興ふる賃銀ですよ。若し自分が物を作つて愉快を得て、そして猶ほ別に報酬を貰はうと思ふ程なら、其次には、子供を産んでおいて代金請求書を差出す様な事になるかも知れぬ。ハムムム。』

『イヤ御老人、そうばかりも云はれますまい。子供は人が皆欲しがりますが、仕事は誰も嫌ひますからね。』『ハムムム、そりや昔の事ですよ。今では誰でも仕事を楽しんで、若しや此の楽しい仕事が無くなりはいまいかと、それを氣遣ふ人がある程です。』
『へえ、どうして又仕事が其様に楽しく思はれる事になつたのでせう。』『仕事は皆樂しみですよ。此の仕事をすれば名譽も得られる、社會の爲めに富も得られるかと思へば、たとひ仕事其者は不愉快でも、やはり其間に樂しみが生ずるではありませんか。又單に器械的の面白くない仕事でも、モウそれを樂しむ習慣が付いて居ますからな。それに又、藝術工藝の仕事にでもなれば、仕事其者に愉快が籠つて居ますからな。』

『成程。然しマア、どうしてそんな幸福な境界になられたものでせうか。』『一口に云へば斯うです。無理に仕事を強いる事が無くなつて、誰れでも自分の一番善く出来る事をするに云ふ自由を持つてゐるからです。』

『へえ、成程。どうか今少し其邊を委しく説明して下さいませんか。』『宜しい。然しそれを説明するには少し昔の事と對照せねばなりません。辛抱してお聞き下さるか。』『聞きますとも。どうぞ願ひます。』『ぢやチト長いが話させう。私が讀んだ本によると、十九世紀には物品製造の術が非常に進歩して、それに伴うては又、巧妙にして且つ廣大たる賣買法が組立てられて、それを世界市場など、呼んで居たのです。そして其の市場が一度開かれてから、別に必要も無い色々な戯れ半分の品物を跡から跡からドシ／＼と作り出して、人の淺はかな虚榮心や奢侈心に投じて、無理やりに賣りつけたものですな。』

『左様。成程。で、それから……』『それから段々其勢ひが盛んになつて、少しでも

手数を省いて、少しでも澤山の品物を作る事ばかり研究して、生産費を減ぜんが爲には殆んど何物をも犠牲にする事になつたのです。労働者の幸福も、健康も、衣食住も、餘暇も、娯樂も、教育も、ツマリ其の生命も、此の生産費の減少と云ふ一大事と天秤に掛ける時には、砂の一粒ほどの重さも無かつたのです。そして其の生産した品物は大概無用の物ばかりであつたのですな。』

『でも新器械の發明のある毎に、人の勞力を省いて居た様に聞いた居ますが。』『ハ、あなたはまだそんな事を考へて居なさるか。如何にも、新器械は人の勞力を省かんが爲に作られたに相違ないが、一方に省かれた結果は却つて他方に浪費される原因になつて、ツマリ新器械は労働者の重荷となつたぢやありませんか。それから謂はゆる文明國(其實は残忍國)の間で十分の賣行がなくなると、今度は從來の範圍外の國々と無理やりに交通を開く。その仕方が又實に憎むべきもので、或は文明に導いてやるとか、或は宗教を傳へてやるとか、或は又そこに侵入して害を受けた自國人を保護す

るとか、少しでも引つかゝりがあれば直ぐにそれを利用して見えすいた嘘を吐いて、とう／＼そこを新市場にしてしまふ。そして其の人民の必要の有無に拘はらず、種々な品物をドシ／＼と送り込んで賣りつける。そして貿易と稱して其の土地の産物を奪ひ去る。其の残忍な有様は實に今の人に想像の出来た事ではありませんよ。』

私は返答に困つて、『それでも世界市場の賣買のお蔭で、品物は精巧に出来て居たと思ひますが』と云つて見た。すると翁は、『ナニ品物が精巧？以ての外のこと。當時の品物は只賣る爲の物で、用ゐる爲の物では無かつたのです。甚だしいのはホンの申譯はかりの拵へ物で、何の役にも立たないのがあつたぢやありませんか。』

『器械などは随分精巧に出来て居た様に思ひますが。』左様器械だけは極めて精巧に出来てゐました。十九世紀の大發明は全く其の精巧な器械にあつたのです。そして其の精巧な器械に依つて無益な劣等の品物を無數に産出したのです。』

私はモウ昔の話に堪へられなくなつたので、斯くの如き生産法が如何に變遷したか

を翁に問うた。翁曰く、『今では賣買と云ふ事がなく、丁度自分の入用な物を作る通りに、人の入用な物を作るのです。そして人手で作るには面倒なといふ品物は、一切大器械の力で作り、愉快な仕事だけを手細工でやるのです。そこで誰れでも自分に適した仕事を見つけたして、厭な仕事といふものは一つも無く、皆な銘々の仕事を樂みにするので。それが又何代も續く間には、熟練の度も非常に進んで来て、少ししか働かぬと思ふ中に、早や餘る程の品物が出来て居ると云ふ様な次第です。前に仕事の無くなるのを氣遣ふ人があるとお話したのも、是れで始めて御合點が行きませう。』私は殆んど感に堪へたが、又ムラ／＼と疑問が湧いて來た。

丁度其時、戸の外に足音が聞えて、やがて彼の戀人等がはいつて來た。彼等は人前にも其戀を恥づるでもなく、世は皆な我等と共に戀に落ちよとでも云ひそりに、如何にも懐こらしく相睦んで居る。ハモンド翁は二人の様子を見て満足の體で、『サアまあ二人ともそこに坐つて待つて居るのだ。お客さんとまだ話が残つて居るから。』

チツクは少し笑ひながら、『成程そうでせう。まだ二時間半しかたちませんからね。二時間半で二百年の歴史は語れない筈です。』所がクララは少し翁に甘えて、『モウお話はお止めなさいよ。あれ正午のベルが鳴るぢやありませんか。』

忽ちにして銀鈴を振るが如き美妙の音楽が響きわたつた。クララは私の手を取つて室外に導いた。翁とチツクとは跡から續いた。我々は斯くて食堂に入つた。此の食堂はハマスミスの客館のよりも更に一段の宏大美麗を極めてゐる。美しい若い娘が美しい花束を一ツづゝ我々に呉れた。四方の壁には昔の神仙談の畫が書いてある。其の子供らしい無邪氣な所に丁度この社會の有様が調和して居る。食物は極めて單純だが、ポルドトの葡萄酒の美酒が一瓶前に据えられた。

食事が終つてから、戀人等は何やらの踊を見に行くと云つて出かけた。翁と私とは窓から射しこむ午後の光を葡萄酒の赤い杯に受けながら、又昔の話に入つた。

此話の終つた頃、丁度そこにチツクとクララとが歸つて來た。私は惜しき別れを翁

に告げて、二人と共に博物館の外に出た。

外には例の灰毛の馬が待つてゐる。三四人の子供が櫻の實を食ひながら馬の顔など撫でゝ居る。チツクは靜かに手綱を取つて、徐ろに馬を引き出した。我々は其まゝ車に打乗つて、涼しい夕風に面を吹かれながら、緑りしたゝる倫敦の町々を、又ハマスミスへと立戻つた。

其の道々の話に、明日はテームス川を遡つて、枯草と小麦の收穫の光景を私に見せようとチツクは云つた。『其時にはお客さんに新しい着物を着せて』と、クララは女らしく氣を付けて呉れた。

十五 美人アンニー、川岸が一面の公園、不平家

ハマスミスの客館に歸りつけば、機織のロバートと女達とが出迎へて、色々と博物館の事など問うた。殊に彼の美人のアンニーは痛いほど私の手を握つて、色々親切にして呉れた。其の夕べ、楽しい小宴が客館に催された。それは半ば私の爲に、そして

半ばチツクとクララとの爲に、であらうと私に推察した。善き酒あり、麗はしき花あり、そして食後には音楽もあつた。中にもアンニーの音楽が最も面白く思はれた。最後には燈も消して、月の光の下に夜のふけるまで物語をした。

翌朝早く目さめて見ると、朝日が窓から差しこんで、此上もない好天気である。枕元には新らしい衣裳が一揃ひ置いてある。私は耻かしい様な、嬉しい様な子供心になつて、それを着て起き出でた。

下に降りると、例の美人のアンニーが、甲斐々々に廊下の掃除などして居る。彼女は私の姿を見るやいなや、箒を棄て、私に近より、暖かいキツスを私に與へた。勿論それに何の意味もあるまい。彼女は『大變お早いのですね』と云つて、又直ぐに箒をとつて掃除を初めた。外に四五人の娘も立並んで庭を掃いてゐる。見く目も心地よい景色である。やがて掃除が済むと、アンニーは私の手をとつて、川に臨んだ椽端の小さいテーブルに私を導いた。パンと牛乳とが其上に置いてある。チツクとクララと

も程なく来た。二人はいよく枯草の收穫に私を連れて行くといふ。アンニーは『それではお客さん、早く行つて入らつしやい』と又私にキツスを與へた。私は殆んど行きたくない心地がした。然し考へて見れば、此様な美しい善い女に、此年になるまで氣の合つた男の無い筈は無いと思ひかへして我愚を笑つた。

それから三人、舟付場の石段を下りて、そこに繋いである奇麗なボートに乗込んだ。チツクは櫂をとつて漕ぎだした。ハマスミスの河岸は見る見る中に我々の目から遠ざかり行いた。

我々は斯くてテームス川を廻りゆいた。チツクは少しも疲れる様子は無く、樂に樂に漕いでゆく。クララは私と並んで居て、チツクの男らしい體格と氣の好さそつた顔付とを、飽かず飽かず眺めいつてゐる。廻るに従つて景色は段々と善くなる。昔は此邊に富豪や貴族の仰々しい別荘が澤山にあつて、目ざはりになつたものだが、今ではそんな物もなく、花と緑との間に樂しげな小さい家が見えつ隠れつしてゐる。

暫くして、船はハンプトンの離宮に着けられた。クララは私を公園に連れて行かうと云つたが、デックは『ナニ公園？今では此テームスの川岸が一面の公園ぢや無いか。この公園を見たつて仕様が無い。それよりか、離宮で晝の食事をして、直ぐに又登るとしよう』と云ひながらボートを繋いで上陸した。

我々は直ぐに離宮の客殿に入つた。そこには午餐のテーブルが用意されて、萬事ハスマイスの客館の通りであつた。

午餐の後、我々は又テームスを廻つた。夕日が沈んで月の光が見えはじめた頃、漸くラニミードの岸に船を着けた。我々は上陸して天幕を張るべき場所を求めた。天幕生活は此の社會の流行物である。

然るに、そこに一人の老人が現れて、内に來て寝ぬかと勧めた。我々は言はれるがまゝに伴はれて往つた。低い丘の程の生籬の間に門がある。老人は其の門内に我々を導いた。門内は廣い花園になつて其奥に小さい家がある。そして其家の小さい窓は早

や燈火の光に黄色くなつて居る。薄あかりに見わたすと、そこら一面の花の盛りで、床しい香ほりが風も無いに動いてゐる。『あらマア！』とクララは先づ感嘆した。『どうしなさつた。刺でも踏込みなさつたか』と老人は問うた。『いえ、そんな事ではありません。花の美しさを譽めて居るのです』とクララは答へた。『ハア、お前さんはこんな事に感心しなされるのか』と老人は嘲笑つて、『マア兎にかく内にはいつて夕飯でも上れ』と云つた。

家の内は極めて奇麗で、清潔で、其中に美しい、若い娘が坐つてゐた。顔や手は日に焼けてゐるが、其代り如何にも健康らしく見えてゐる。着物は極めて單純で質素であるが、さりとしてそれが貧ゆゑとはどうしても見えぬ。態との好みとしか思はれない。彼女は我々の來たのを見て、如何にも嬉しげに出迎へて、手を打つて喜んだ。『エレン、お前はそんなに嬉しいのか』と老人は云つた。『嬉しう御座んすとも。お爺さん、あなた、ソウぢやなくて？』とエレンは云つた。『よし、マア嬉しいとして置かう。お

客さん達、サアお坐りなさい」と老人は例の口調でやる。

私は不思議に思うて此の老人を見てみると、チツクは私の耳に囁いで、「不平家だね。今でもこんな人がたまにはあるのです」と説明した。それから夕飯になつて、老人は食物の不平から始めて、色々時節の悪くなつた事を嘆息した。そして私が遠國から来た昔の人だと聞いて、頻りに昔の社會の美を説いて、今の道德家や歴史家が餘りに昔の社會の害毒を誇張するのだと云つた。「そんな事を仰しやるが、お爺さんの様な呑氣な人が昔の社會に居たら、キツト餓死でせう」とエレンは云つた。

それからまだ色々な話があつて、最後に老人はこんな事を云つた。「私の考へでは例へば此エレンの様な美しい女は、昔の社會であつたら、貴婦人とやら云ふ者になつて、こんなに日に焼ける事なんぞ無いだらうに。」

此時クララは初めて口を開いて、「日に焼けたと仰しやるが、私はエレンさんの田舎の生活が羨ましい。まあ私の此の色の厭らしさを見て下さい」と云ひながら、其袖を

まくつて眞白い腕を現はした。エレンは此の新しい友に接吻した。

それからエレンの善い聲の歌など聞かされて、此の老不平家も機嫌を直し、皆に愉快に寢床に入つた。

十六 枯草の收穫、野生の美人、戀の人殺し

次の朝早く、私は獨り靜かに目さめて戶外に出た。咲きさかる花園の中を過ぎて野に出ると、人々は早や枯草の收穫に忙がしくしてゐる。人の多くは若い女で、昨夜のエレンの姿と同じく、腕も現はに立働いてゐる。けれども其の立働きが苦勞とも見えず、皆な樂しげに語りかはして居た。

朝飯の後、老人は何かにつけて例の不平を並べて居たが、エレンは其の愛らしい聲で次の様に語つた。「そりや私達はこんな小さい家に住んで居ますさ。けれど、そりや私達が好だからするのぢやありませんか。大きな家に住みたくばいつでも行つて住まれますもの。それに働くのも好きな時に働くのですもの。昔の人の無理やりに小さな家

に押しこまれて、食べる物も着る物も十分には無く、そして無理やりに働かせられたのとは違ひます。』

七時には又船に乗つて水上に浮んだ。老人とエレンとは川岸まで送つて呉れた。クララは此の野生の美人に對して少しく耻づる様子であつた。

今日は私が權を取つて働いた。イトンを過ぎ、キンゾル宮を望んで進んだ。キンゾル宮は今では好古品を陳列した博物館になつてゐる。水の上では昨日も今日も色々な形の多くの船に行き會つた。中には如何にも輕げに見える自働船が幾らもある。それは水上、陸上、共に行はれる器械だと云ふ。チツクは私に其事を説明しかけたけれども、私は聞いても容易に分らないと思つて、只フンフンと聞き流してしまつた。

それからヒシヤムまで行つて、暫らく上陸して晝の暑さを避け、夕月の光に又水上に浮んで、終にカペシヤムの岸に至つて上陸した。ここにはチツクの友人のアレンと云ふ人が居るので、我々は其家を訪ふのである。

我々は月光を浴びて牧場の草を踏みながらアレンの家へと赴いた。アレンは其門に倚つて我々を待つて居た。彼は四十ばかりの親切らしい人であるが、其顔には愁の雲が懸つて居た。

『何か善くない事でもあつたのか』とチツクも其の愁の雲を認めて問うた。アレンは少し伏目になつて、『實は死んだ人があつてね』と悄然として答へた。

『アアそうか。それは悪い事だつた。然し之ばかりは仕方が無いからなあ。』『そうさ。けれど今度のは自然の死で無いのだからね。それに場合に依つては今一人死ぬるかもしれないのだからね。』

(69) アレンの語る所によれば、死の事實は左の如くである。此の近處に一人の美しい娘があつて、皆の人に好かれて居たが、若い男の中には深く彼女を戀しく思つた人々も多くあつた。然るに彼女は其中の或一人をば殊に深く愛する事になつた。すると或る他の一人の男は、非常の失望に陥つて少し氣が狂はしくなつて來た。娘も初は其男を

戀しいとは思はないにしても、善い友達として交はつて居たが、餘りうるさくされるので、終には少し厭う様になつた。そこで事は六かしくなつて、多くの人は彼の男に忠告もして見たが、中々そんな事を聞入れようともせず、少しく不穩の舉動もある。斯くては止むを得ず此の土地から立退を求めか、但しは他の人々が立退くか、何れかにせねばならぬ場合に立至つた。然るに其際、彼の男は娘に會ひ、又その勝を得た戀人に會ひ、何か激した言葉を交はした末、終に全く其心を狂はせ、ありあはせた斧を取上げて戀の敵を打倒した。扱、跡になつて見れば、彼の男も己に返り、深く自分の罪を悔いて、今度は自殺したいと云つてゐる。若しそうでもなる時には、彼の娘も亦た或は死なぬとも限らぬと云ふのである。

アレンは曰ふ。「こんな譯で、丁度去年の地震と同じで、我々何とも致方が無いのだ。」
 チックは聞終りて曰ふ。「あゝ、そんな事か、どうも仕方が無いな。死んだ者を生返らす譯には行かず。殺した人に悪意があつた譯では無し。其上に又一人死んど見た所

で何の役にも立つまいからなあ。」

「そうさ、其通りさ。それでマア一方には娘を慰め、一方には其男を何處か遠方にも連れて行かうかと思つてゐるのだが、何しろ困つた事さ。」

私は此話を聞いて先づ一驚を喫した。人を殺しても別に罪に處せられぬとは、抑も何たる事であらうか。然し善く考へて見ると、ハモンド翁の話の中にもあつた通り、悔悟が則ち罪の報で、其外に刑罰の必要はないのである。斯くて此の社會の人々は刑法も監獄も無くて、猶ほ十分に人命の安全を保ち得て居るのである。

十七 草原の上の娘達、新らしい手工時代

翌朝又水上に浮んで、兩岸の好景を見ながら徐ろに船を廻らせた。ゴリンクの岸まで来ると、五六人の娘達が草原の上に居並んで、我々を旅人と見て手招きして呼び止める。彼等は近處の野の枯草の收獲の暇に、今こゝに來て水浴をして居たのである。薄い着物を着て、素足のまゝで居る其姿の清らしさ。彼等は是非とも我々を枯草の野

に伴うて一緒に食事をしようとして勸めて呉れたが、デックは今少し上流の方に目的があるからと云つて、纒かにそれを断つた。

そこに若い男の二人乗つた一艘の小船が現はれた。娘達はキヤツキヤツと笑ひながら喜ばしげに其船に打乗つた。何處に行くかと問へば、あちらの家の建築の爲に石を取りに行くと言ふ。枯草の收穫の間に、珍しい此の仕事を見つけたのは、彼等の限なく喜ぶ所である。それで今彼等は暫く枯草の野を餘所にして、此の楽しい仕事に就くのである。

其舟の出て行つた跡で、クララの主張により、我々は今建築中なる其家を見に行つた。家は既にほど出来上つて、一群の男女が其の内部の壁と天井とを塗りながら、花や模様を一面に彫りつけて居たが、いづれも尋常ならぬ美術的の手腕を持つて居るらしく、極めて愉快げに、極めて心安げに、而も極めて熱心に働いて居た。

それから我々は又船に乗つて、今度はワリングフォードに上陸した。こゝも昔とは

打つて變つて、貧民や貧家の有様は跡もなく拭ひ去られて、清楚なる小都會になつて居る。こゝで我々は晝飯のテーブルに着いたが、丁度その席上でハモンド翁と同じ様な好古癖の老人と一緒になつた。

其の老人の語る所に依れば、彼の大變動の後、都會の人々が田舎に散じて、一時は生活の方法に慣れぬが爲め、現に此町に於いてもパンを焼く人が無くて、毎朝倫敦から新聞と一緒に汽車で送つて来た程であつたが、暫らく立つ中には、皆が追々と手工手藝を仕覚えて来た。變動の以前までは機械の進歩と使用とが盛んなもので、あらゆる仕事を機械力でやる事になつて居たが、其の機械時代が一轉して新しい手工時代に移つて来た。勿論、必要な幾種と有益な機械は保存されたが、機械は到底美術的の働きをする事が出来ないで、漸々に機械の用は減じられて、手工手藝の用が増して来たと言ふ。

食後に老人は、昔と今との工藝品を對照させた。陳列場に我々を導いたが、奴隷と機

械とを以て製造させた昔の粗雑な品と、自由な人の自由な意匠と想像とに依つて製作された今の優美な品とは、到底比べ物にならないと思つた。

我々は又船に乗つて漕ぎ登つた。風の無い晝過ぎの空に、琥珀のような薄雲が懸つて少しは暑くらしい心地もするが、其の薄雲の底にはあちこちに青空がほの見える、天高く、水廣く、誠に晝の様な眺めであつた。丁度そこに跡から追ひかけて来る一艘の小舟がある。誰かと思れば、思ひもかけぬ彼のラミミードの岸の美人エレンである。彼は近い中に父と共に旅をするので、再び我々を見得るや否やも知れず、再び此のテムスの上流の景色も見得るや否やも知れず、それで斯く跡を追うて来たとの事である。長い水路を強く漕いで、少し上氣した其の顔の美しさ。私はチツクとクララとの指圖により、エレンの舟に乗移つて櫂を取り、二艘並んで又好景の中を漕ぎ登つた。

十八 夏の初の美しき晝圖、自然と同化せる人の子

私はエレンと共に昔を語りながら船を漕ぎのぼせた。エレンは父の話に依つて頗る

昔の事に趣味を持ち、其の研究を樂しみにして居るのである。そこで長い日の船路によもやまの話の末、今度父と共に北の方に旅をするに就いて、私にも一緒に行かぬかと云ふ。猶ほ其上に、長く長く彼等と共に住まぬかと云ふ。私は此の美人に同居を求められて、年にも似ず若々しい心地がした。

其の翌日の晝頃、二艘の船は目ざす地點に着いた。柳の茂つてゐる小さな灣に船を繋いで上陸した。チツクとクララとの友達が五六人、岸に立つて待つて居た。二人は其五六人に取まかれて、久しぶりの話に果しが無い。私はエレンと共に知らぬ道を先に進んだ。少し行くと、生籬があつて、花園があつて、緑りの木々が茂りあつて、夏の初めの美しさをこゝに集めた一幅の晝圖の底に、破風澤山な古風の薬屋がサモ床しげに立つてゐる。エレンは其の薬屋の壁に寄り添ひ、身を斜めに凭せかけて、『私は此の景色が見たさに来たのですよ。あゝ愉快なこと。時は夏、天氣は晴れ、天も地も草木も木も家も人も、マア何といふ麗はしさでせう。』彼女は今この自然の美に酔はされてい

恍惚として無我の境に入つて居る。花か人か縁か空か。私は之を贊するに一語を得なかつた。

暫らくして、エレンは私を導いて家の中に入つた。家の中は寂寞として人の影も無い。『あゝ分つた。皆な此頃は天幕の中に住まつてゐるのです』とエレンは云つた。そこにチツクとクララが我々を呼びに来た。エレンはクララと共に彼方に行き、私はチツクと共に午餐の前に一浴を試むべく川岸に赴いた。

水浴の後、チツクは私を食堂の方に導いた。如何にもエレンの云つた通り、華やかな天幕が幾つも張りわたされて、其蔭の芝の上に男女老若の四五十人が、立つたり、坐つたり、横になつたりしてゐる。聞けば、枯草の收穫は夏祭の様なもので、人々は皆この美しい景色の中に酔つてゐるのである。彼等は自然の一部として、自然に同化してゐるのである。自然は今や夏の初、陽氣の發する眞盛りであるので、自然の子なる人も同じく、洋々悠々として、楽しみ且つ働いて居るのである。

午餐は會堂で開かれるので、やがてチツクは私を會堂に導いた。會堂は只だ清潔な質素な建物であるが、食卓に居並んだ男女を見ると、健康らしい、晴々しい、輝きわたる、美しい其顔が、何にも優る裝飾である。

私は入口に立つて此の光景を眺めて居ると、直ぐ前の方にクララとエレンとが座つてゐる。其間にチツクの席があけてある。彼等は其の美しい顔に笑ひを帯びて、何か頻りに隣の人と話してゐる。私の方には見向きもしない。私はチツクを顧みて、暗に食卓に案内されん事を求めた。然るに怪しむべし、チツクは笑ひを含んで立つて居ながら、私の事には氣もつかない様子である。よくよく見渡すに、一座の人々は少しも私の存在を認めて居ない。私は忽ち胸の奥に痛みを感じた。チツクは私に言葉も掛けずツツカツカと彼方にゆく。クララとエレンとはこちらを向いて、知らぬ顔でニコリともせず、又あちらを向いてしまつた。

私は何とも云はれぬ堪へがたい心地がして、其まゝ會堂を飛出したが、忽ち足元に

黒雲が巻き起つて、兎かくする中、私は只一團の闇に包まれて、立つてゐるのやら、歩いてゐるのやら、坐つてゐるのやら、寝て居るのやら、何とも斯とも分らない氣持になつた。

* * * * *

私は今ハマスミスの私の家の寢床の上に横たはつて居る。扱は長々しくも未來の理想郷の夢を見て居たのであつたか。

(完)

百年後の新社會

エドワード・ペラミイ著

(一) 結婚式の延引、睡眠術

時は耶蘇紀元千八百八十七年、アメリカのボストン市にエストと云ふ金持の若紳士があつて、エチスといふ同じ金持の美しい娘と約束が整つて、程なく結婚の式を擧げる筈であつた所、貧富の懸隔が段々は鮮しくなつた此頃の世の中であるので、資本家に對する労働者の不平が盛んになつて、あちこちの工場や製造所にストライキが幾つも起つて、さすがの金持連も餘り安き心は無いので、折角の結婚式も暫らく延々となつて居た。

五月三十日の事、エストはエチスの家の宴會に招かれて、夜も稍々更けた後、エチスと惜しき別れをして、寂しい獨り住みの我家に歸つたが、いつもの癖で目が冴えて

眠られない。エストには此の眠られぬ癖があるので、地下室の一部に秘密の二室を作つて、そこに極めて静かな寢床を設けてゐるのだが、それでも今夜はどうしても眠れない。そこで、これも亦かういふ場合のいつもの例に従つて、動物電気博士とやら稱する催眠術の先生を呼びよせて、其力によつてヤツトの事で熟睡した。翌朝九時に呼醒す様にと老僕に命じた儘で。

(二) 百十三年の眠

「ヤ、ヤ、目をあけそうだ。餘り大ぜい人の居ない方が可いだらう」といふのは男の聲。

「ぢやキットあの事は云はないで下さいよ」と云ふのは女の聲。そして孰れもヒソヒソ聲である。

「マア模様によつてさ。『厭、厭、キット云はないで下さいよ。』『あの子の云ふ通りにしておやりなさいよ』と云ふのは又別の女の聲。

『よしよし、それでは云はないよ。サ、早くあららに行つた行つた。それ、それ、目をあけそうにしてるぢや無いか。』

是れで話は止んだ。衣の摺れる音が聞えたかと思ふと、エストはフツト目が醒めた。見れば六十ばかりの、立派な柔和な紳士が自分の上に俯向いて居る。固より見覚えの無い人である。あたりを見廻すと、これも見覚えの無い部屋である。

『如何です、御氣分は』と老紳士は云つた。『こゝは一體どこです』とエストは云つた。『こゝは私の内です。』『どうして私はこゝに來たのでしよう。私は確に私の内に寢たのですが。』

エストは只だ呆れて居る。老紳士は其の説明はせずに、『私は醫者だが、マアちと氣を落ちつけて下さい』と云つて、一杯の飲物をエストに與へた。エストはそれを飲んで猶ほ頻りに説明を求めた。老紳士は漸く『此の説明はあなたのお考へなさるやうな單純な事ではありません。それよりは先づあなたにお尋ねしますが、あなたがあなた

のお内に寝たと仰しやるのは、それはイツの事です。』『イツと云つて、勿論昨晚の事です』とは云つたものゝ、エストはどうやら餘程長く寝た様な氣持がする。それで若しや一日寝過したかと思つて、『三十日の夜です』と云つた。『ハ、ア、それは何月の事です。』『何月？ 勿論今月です。五月です。』『今月は九月ですが。』『ナニ九月！ 五月から九月まで！』『イヤまあお待ちなさい。あなたは五月の三十日に寝たと仰しやるが、それは何年の事です。』『勿論千八百八十七年の事です。』エストは目を丸くして驚いて居る。老紳士は更に一杯の飲物をエストに薦めて後、おもむろに次の説明を興へた。

『見受けた所、あなたは三十歳ばかりの青年で、其の容貌は永い眠の間に少しも變らなかつたものと察せられるが、驚きたまふな、今日は紀元二千年の九月十日で、あなたは正に百十三年と三ヶ月と十一日といふ永い月日を眠つたのですぞ。』餘りの事にエストは殆んど氣絶したが、老紳士の藥力に依つて、又十二時間の安眠

を食つて、それで稍や心氣を恢復して、半信半疑の間に老紳士の話を聞くと、ザツト次の通りである。老紳士が化學の實驗室を其の廣庭に作るつもりで、地盤を堅めさせて居た時に、その地の底から十九世紀時代の建築物を掘り出した。其の上に灰の深く積んで居た事から想像すると、曾てこゝに火事があつて、此の地の底の建築物だけ焼け残つたものと思はれた。それで老紳士は好奇心に驅られて、其の建築物の中を搜索した所が、そこに一つの寢臺があつて、生きたような一青年が其上に横はつてゐる。意外の獲物に驚かされて、老紳士は猶ほ段々取調べて見た所が、催眠術の作用に依つて永く睡眠の状態に陥つた者と認めたので、それぞれ法を施した結果、即ち此の通り蘇生したのである。

此の説明を聞いてもエストは猶ほ半信半疑であつたが、老紳士が彼を伴うて家の棟の見物臺に登つた時には、彼もモウ紀元二千年の今日を疑ふ事が出来なかつた。何となれば、見渡す限りの美麗宏壯な其の市街は到底十九世紀の物では無かつた。そして

(84) 猶よく見渡すと、川の位置と海の位置とは正に昔のボストンの地勢其儘であるのだもの。

(三) エチス

エストを掘りだした此の老紳士はドクトル・リートといふ醫士であつた。エストは醫士の懇ろな言葉に従ひ、先づ湯に入つて着物を改め、軽い食事を取つて後、リート夫人と令嬢とに紹介された。エストが最初目の醒めかけた時に臙げに聞いた女の聲は即ち此の二人であつたのだ。日もやうやく暮れて、其夜は四人で限りのない様々の物語に時を過ぎした。エストは紀元二千年の此の婦人達を物珍らしく眺めたが、夫人も令嬢も美しい人で、殊に其の活々として、如何にも健康らしい所が、どうしても昔の婦人とは違つて居る。それに一つエストの殊に驚いたのは、令嬢の名が(自分の昔の愛人のと同じく)エチスと云ふ事である。

其夜の談話は、勿論、エストの眠つた時の事で持切つて居たが、結局、其時の事情

は多分斯うでもあつたらうかと云ふ事になつた。即ち、エストの眠つた其晩に大火事があつて、彼れの家は焼けて仕舞つた。彼には家族もなく、地の底の寢室の事は彼の老僕と動物電氣博士との外に知る人が無かつたので、其の老僕は焼け死んだかも知れず、電氣博士はどうなつたか分らないが、兎にかくエストは焼け死んだものと親戚友人は思つてゐたに相違ない。それから其の跡の土地はどうか云ふ譯で空地になつて、其後、今の様な庭園にされて居たのであらう。

此の談話の中にも、エストが屢々エチスの美しさに心を引かれて其顔を打見ると、いつも二人の目と目が行き合つて、ハツとしては脇にそらして居た。

(四) 新社會への繋ぎの鎖

(85) 夜が更けて夫人とエチスとは寢室に退いた。エストも今夜は容易に眠られそうもないといひ、醫士も夜ふかしが好いと云ふので、又暫らく二人で話す事になつた。醫士曰く、「今の世に十九世紀の人と話をするのは實に得がたい機會ですからな。」

それから話は今昔の比較になつて、エストは先づ昔の労働問題の始末を尋ねた。醫士曰く、『其の問題は自然に解決されたのです。經濟界の進化の當然の結果で、それより外に進み様が無かつたのです。それで此の社會の爲した事は、只だ其の進化の勢ひを助けて其の歩みを早めたまでの事です。』『そうですかねえ。私の眠つた頃までは、まだそんな進化の傾きも見えませんでしたかねえ。』『イヤ、それについて今の歴史家が不思議がつて居るのですよ。あなたの時代の人は實にどうも時勢を察するの明が無かつたと云つて。其頃もう随分色々な兆候があつたではありませんか。貧富の懸隔、貧民の不平、社會一般の不穩と悲惨……』『それは勿論、社會の動搖は我々も認めて居た所で、實にどうなる事かと思つて居ました。』『其の動搖の第一は何でしたか。』『それは云ふ迄もなく労働者のストライキでした。』『其ストライキが何故それほど有力だつたのでせう。』『それは勿論労働者の團結した爲です。』

『サアそれです。労働者の團結したのは大資本の力に抵抗する爲で、畢竟は資本が集

積した結果でせう。少しづつゝの資本が別々に運轉されて居た時には、労働者も少し奮發して勉強すれば資本家となれたのですが、段々と資本が集積して大資本ばかりになつたので、資本家と労働者との階級が全く別れて、労働者は労働者と團結して資本家に當るより外は無くなつて來たのです。當時の記録を見ると、此の資本の集積に對する世間の攻撃は随分激烈で、大資本の壓制は古今未曾有の暴戾を極めるなど云つたものですね。然るに、それらの攻撃にも拘はらず、資本の合同は彌々盛んに行はれて鐵道も製造所も皆シンチゲートやトラストの物となつてしまつたのです。それから都會には商品の大陳列場が出來て、總べての小賣店を併呑してしまふ。地方の小賣店は皆な此の大陳列場の支店の爲に併呑されてしまふといふ有様です。そこで先の小賣店の主人は、モウ獨立では其の資本を卸す事業もないので、止むを得ず其の陳列場の株主となり、又その雇人となつてしまつたのです。そんな譯で、世間の攻撃にも係はらず、社會の事業が終に少數の人々の手に握られてしまつたのは、經濟上としてもソウ

ならねばならぬ道理があつたからの事です。それから、いよいよ大資本で大仕掛にやつて見ると、それは以前小仕掛でやつたとは譯が違つて非常な効果を奏する。世界の富は暫らくの間に驚くほど増加する。勿論、其の結果として富者ばかり益々富んで、貧富の懸隔は層一層と甚だしくなつたのではあるが、さりとて此勢ひを今さら昔に返す事は出来ない。それを昔の小仕掛に返すのは社會全體の上から非常の損耗です。そこでどうかして此やりかたで以て、富豪政治の壓制を免れる法は無いかと云ふ考へが世間に湧いて來たのです。それで、資本の合同、事業の獨占到趨く傾向は、其の眞の意味に於いては決して批難攻撃すべき者ではなく、それこそ即ち新社會に到達すべき進化の道行だと云ふ事が分つて來たのです。

『そして二十世紀の初めには、モウちゃん此の進化が行はれてしまつたのです。と云ふは、全國の資本を唯一つに合同し、全國の事業を唯一つに獨占したのです。即ち國民全體が大會社、大シンチゲートを作つて、總べての事業を國民の手でやる事に

なつたのです。トラスト時代は終に一大トラストに歸したのです。扱そつなつて考へて見ると、工業なり、商業なり、總べての人民の衣食住を司る經濟上の事が、人生第一の必須の事であるのに、それを久しい間、資本家とか富豪とかの手に握らせて、彼等が私欲の計ひに任せておいたのは、何といふ不都合な、何といふ馬鹿らしい事であつたか知れないのです。それが丁度、昔し政治上の權力を貴族の手にばかり握らせて、人民全體の安危を彼等の虛榮心の計ひに任せたのと全く同じ事であつたのです。』

(89) 『成程、どうも非常の變化です。然し、それ程の大變化を行ふには、定めて多くの血を流し、多くの混雜を起した事でしょうね。』『イヤ、何の混雜もありません。此の變化は早くから見えて居たので、輿論は國民全體を其の背後に控えて既に十分に熟して居たのですから、大トラストも、大シンチゲートも、もはや如何ともする事は出來なかつたのです。それに人民の方でも、それらの大會社に對する悪感も消えてしま

つて、是れも進化の道行である、新社會への繋ぎの鎖であると思ふ事になつたのです。まだ十九世紀のあなたの時代では、工業及び商業の一切を國家事業にするなどは、逆も出来る事ではないと思はれて居たでせうが、其後、大會社の現出によつて、人民は眼前に其の大仕掛の實驗を見たのです。それで其の大會社から國民事業に轉じたのは實にホンの一飛であつたのです。」

(五) 國民労働隊

エストは醫士の説明を聞いて、暫らく目を閉ぢて其の變化の次第を考へて居たが、疑問が續々湧いて來る様子で、先づ『それでは政府の職掌が餘り多くなりすぎはしませんか。我々の時代には、眞の政府の職掌は軍事と警察とだけだと考へられて居たのですが』と問ひだした。醫士はそれに答へて、『昔の政府は人民の子弟を驅つて血の雨を降らせて、おまけに多くの金を湯水の様に使ひすてたが、今の世には敵國も無ければ戦争もない、政府の職掌は只だ人民の爲に饑寒を防いで、其の身體の保護と給養と

を勉めるだけの事です』と説明した。エストは又、『其様な事務一切を政府に任せては政治家が甚だしく腐敗する恐れはありませんか』と問うた。醫士は又、『今の世には政黨もなければ政治家もない。官吏が私利を計らうにも計り様が無い。又その必要も無い。それらの事は、是れからユル／＼我々の社會の實狀を御覧になれば分ります』と説明した。エストは更に轉じて労働問題の始末を問うた。『國民が資本家の代りになつたとすればヤハリ國民が労働者の扱ひに困りはしませんか。』『そんな事はありません。我々は労働をも國民的組織にして、ツマリ昔の徴兵制度を労働問題に適用して居るのです。』『それで其の労働軍隊の服役年限は終身ですか。』『決して、決して。昔の工場には子供も老人も居たでせうが、今の労働隊は普通教育の終了する二十一才から四十五才まで二十四年間に限るのです。』

エストは更に又、『軍隊は皆な同じ様な仕事をするから始末が善いのですが、労働隊では仕事の分け方をドウするのですか。誰れが其れを極めるでせう』と問うた。『それ

は自分の思ふ通りに極めるので、何んでも一番善く自分に適した事をやるのが、社会の爲にも利益であり、又自分の爲にも愉快だといふのが我々の主張です。『それでは或る仕事には志願者が多くて、或る仕事には志願者が無いといふ困難が起りはしませんか。』『其の困難を除く爲に、仕事の種類に依つて労働時間を定めるのです。即ち、志願者の多い仕事は其の時間を長くし、志願者の少ない仕事は其の時間を短くするのです。一日の労働時間は僅かに十分と云ふ様な仕事もあるのです。是れで以て仕事と志願者の数とを釣合はせて行くのですが、若し又、極めて困難で、極めて危険な仕事がある時には、特別名譽の業務として隊中一般から義勇者を募集するのです。又總べての労働員は種々なる場合の必要に應ずる爲に、其の専門の仕事の外に第二第三の副専門を定めて其の練習をもやつておくのです。然し、多くの場合、専門労働員に不足を生じた時は、大概普通労働員の方から補充するのです。』『其の普通労働員とは？』『成程、それはまだ説明しませんが、凡そ新入の労働員は最初の三年間まづ普通労働員となつて、三年の後に始めて専門の仕事に就くのです。専門の仕事を選ぶ事の出來ないほど遅鈍な者は止むを得ず生涯普通労働員で終る事になるのです。』『然らば精神的仕事をやらうといふ人はドウするのでせうか。』『それは三年の普通労働を終つた後、自分の信する所に依つて定めるので、志願者はそれ／＼公費を以て専門の學校に入れる事になつて居るのです。』『それでは労働を避ける爲に専門學校の入學を志願する者が多くて困りはしませんか。』『イヤ、其様な事は決して無い。才能の無い人が才能の優れた人々の間に交つて行くよりは、他の仕事に就いた方が餘ほど樂ですから誰もそんな馬鹿な事をする者はありません。尤も、果して才能があるかないか、果して何れに才能が適してゐるか、人にも自分にも分らないものですから、苟くも少しく志しのある者は遠慮なしに試みさせるのです。そして不適當ならばズン／＼と方向を換へさせる迄の事です。それで各種の學校にも三十歳までは自由に入學を許す事になつて居ます。』

は自分の思ふ通りに極めるので、何んでも一番善く自分に適した事をやるのが、社会の爲にも利益であり、又自分の爲にも愉快だといふのが我々の主張です。『それでは或る仕事には志願者が多くて、或る仕事には志願者が無いといふ困難が起りはしませんか。』『其の困難を除く爲に、仕事の種類に依つて労働時間を定めるのです。即ち、志願者の多い仕事は其の時間を長くし、志願者の少ない仕事は其の時間を短くするのです。一日の労働時間は僅かに十分と云ふ様な仕事もあるのです。是れで以て仕事と志願者の数とを釣合はせて行くのですが、若し又、極めて困難で、極めて危険な仕事がある時には、特別名譽の業務として隊中一般から義勇者を募集するのです。又總べての労働員は種々なる場合の必要に應ずる爲に、其の専門の仕事の外に第二第三の副専門を定めて其の練習をもやつておくのです。然し、多くの場合、専門労働員に不足を生じた時は、大概普通労働員の方から補充するのです。』『其の普通労働員とは？』『成程、それはまだ説明しませんが、凡そ新入の労働員は最初の三年間まづ普通労働員となつて、三年の後に始めて専門の仕事に就くのです。専門の仕事を選ぶ事の出來ないほど遅鈍な者は止むを得ず生涯普通労働員で終る事になるのです。』『然らば精神的仕事をやらうといふ人はドウするのでせうか。』『それは三年の普通労働を終つた後、自分の信する所に依つて定めるので、志願者はそれ／＼公費を以て専門の學校に入れる事になつて居るのです。』『それでは労働を避ける爲に専門學校の入學を志願する者が多くて困りはしませんか。』『イヤ、其様な事は決して無い。才能の無い人が才能の優れた人々の間に交つて行くよりは、他の仕事に就いた方が餘ほど樂ですから誰もそんな馬鹿な事をする者はありません。尤も、果して才能があるかないか、果して何れに才能が適してゐるか、人にも自分にも分らないものですから、苟くも少しく志しのある者は遠慮なしに試みさせるのです。そして不適當ならばズン／＼と方向を換へさせる迄の事です。それで各種の學校にも三十歳までは自由に入學を許す事になつて居ます。』

エストは彼れを聞き、之れを聞き、分つたようでもあり、又胸に落ちないようでもあり、暫らく茫然としてゐたが、忽ち思ひ出した様に、「それはソウと博士、其の勞働隊に於いては賃銀(或は給料)の問題は一體ドウなつてゐるのですか」と問うた。醫士は「ハツハ、」と笑ひだしたが、「成程、其の御疑問も御無理ではない。然しアナタもまだ體が十分でない。夜も更けてモウ三時になつた。今夜は是れだけにしておいて、是れでも一杯飲んでお休みなさい。

エストは醫士に與へられた一杯の酒を飲んで、猶多くの疑問を抱いたまゝ眠に就いた。

(六) 同情の手

翌朝、エストが目さめた時、暫らくは昨日の事を忘れて、昔のエヂスに別れて地の底の寢室に寝た夜の其の翌朝と思つて居た。まだ目も十分には開かず、只だ心地よくウツラウツラとして、近々結婚する筈の事など思ひめぐらしてゐたが、フトもう何時

か知らんと、目を開いて見ると、いつもの所に時計がない。オヤと思ふ中に昨日一昨日の事がピカ／＼と頭の中に閃きわたつた。ムックと寢臺の上に起きあがつたが、頭がグラ／＼として居てたまらぬ。今度は寢臺から飛び降りて、破れそうな頭を両手でシツカリおさへて居たが、やはり立つても居ても居られぬ心地がする。慌てながら着物を着て、帽子を取るなり直ぐに表に飛びだした。別に戸締りも無い。盜賊の居ない世の中と見える。

エストは新しい空氣にホット息をつきながら、此の珍らしいボストン市を經めぐりはじめた。見れば見るほど驚かれる變化である。子供の時に旅に出て、五十年の後に故郷に歸つた人が、其の變化に驚く話を聞いた事もあるが、それでも今エストの場合には比べ物にもならない。況んや彼は昨夜眠つて今朝目さめたと感じて居るのに、時は既に百餘年を経て、世は斯くの如く變化してゐるのである。凡そ二時間半ばかりも殆ど夢中の有様で此の異國を歩いた後、エストは又元のリート醫士の家に歸つては

来たものゝ、何となく悲しい様な、苦しい様な、恐ろしい様な気がして、只だ茫然と立つて居た。そこにエヂスが現はれて、『マアあなたドウなさいました』と氣遣ひながら摺りよつて来て、様々と慰める。エストは溺れた人が投げられた綱にすがる様に、思はずエヂスの手を取つて其の深い同情を感謝した。

(七) 一様の分配

エストはエヂスの同情に慰められて緩かに胸を落ちつけながら、程なく醫士夫婦と共に食卓に就いた。『今朝の散歩で大ぶん御見物が出来ましたね』など、夫人が話したしたので、『實に私は驚いてしまひましたが、中にも一番不思議に思つたのは、商店だの、銀行だのが此の市中に一つも無い事です。あれは一體どういふ譯です』とエストは問ひだした。醫士は微笑しながら『今の社會にはモウ其様な者の必要が無いのです。賣るの買ふのと云ふ事が無いから商店も無い。金だの錢だのと云ふ者が無いから銀行も無いのです』と答へた。食事が終つて、醫士は例の屋上の物見臺にエストを導き、

更に前の話を續けた。『エストさん、昔の社會では生産を私人の手に任せて、無数の人が銘々勝手な物を産出したので、それで亂雑な交換(即ち賣買)が必要で、従つて其の交換の媒介として貨幣(即ち金錢)も必要であつたのですが、今の社會には國民全體が一手で以て生産をやるので、人民衣食住の需要品は悉く國庫から直接に分配する事になつて居るのです。』『では其の分配法は?』『それは極めて簡單です、政府は毎年の初に總べての人民に對し其の分配額に應ずるだけの切手を割りつける、人民は其の切手を近所の物品陳列場に持つて行つて、入用な品物を受取るのです。尤も、昔の貨幣の名前だけは残してあつて、其の切手には矢張り圓と錢との價がつけてあつて、陳列場に持つてゆけば書記が其中から、こちらで受取つた品物の價だけを鈔みきる事になつてゐるのです。』『それでは若しか人が一年の分配額を早く使ひ過ぎした場合に?』『成程、御尤も。それに對しては翌年の分を少しくらゐる前借りする事も出来るのです。然し、分配額は随分澤山にしてありますから、それを使ひ盡す場合は少ないの

です。それでも非常に不取締な人に對しては、一月毎にか或は一週間毎に切手を渡すのです。それでもまだいけない時には、全く切手を渡さない事もあるのです。『それは或では其の分配額を使ひ盡さない時には段々貯蓄が出来る譯ですね。』『成程、それは或る場合には少しくらゐ許されますが、黙つてゐれば其の残つた分は其人の不用の者と見做して國庫に收めてしまひます。』『それでは節儉貯蓄の考へが全く無くなつてしまひそろに思はれますが。』『そんな考へは無くして善いのです。總べての人はオシメの中から墓の中まで全國民の保護を受けてゐるのでから、別に銘々が貯蓄などする必要はありません。』『でも人によつて多くの分配を受けるものと不足な分配を受けるものとがあります。そこで又昨夜の給料問題が起つて來ますが、それは矢張り政府で定めるのですか。随分困難な事です。』『それにしても別に困難はありません。職業の種類によつて給料を定め、志願者の多少を見て年々其の増減を行つても善いと思ひます。然し今の社會は職業の高下を認めません。』『では何の資格に對して分配する

のです。』『人たるの資格に對して。』『では總べての人が皆な一樣の分配を受けねばならぬ譯ですが。』『勿論そうです。』

(99)

此に到つてエストは實に驚きの極點に達した。疑問はいろ／＼と湧いて來る。人の働きには甚だしい差別があるのに、それに一樣の分配をするとはドウしても呑込まれない。醫士はそれを説明して曰く。今の社會は總べての人に其力だけの働きを要求するので、働きの結果には差等があつても、精一杯と云ふ所は一樣である。多く働き得る者が多く働くのは當然で、それが働かぬ時には罰をも加へねばならぬが、力の足らぬ者が多く働き得ぬのも亦當然で、それを責める筈はない。エストは又別に疑問を生じた。其様に分配を一樣にしては、人を奨勵する法が無くなりはせぬであらうか。博士はそれを説明して曰く。人は衣食の憂や奢侈の慾ばかりに刺激されて、それで働いてゐるのではない。昔からも衣食以外、金錢以外、種々な奨勵法があつた。名譽及び他人の感謝と云ふ事が、いつでも一番強い奨勵になつてゐる。今の社會には下等な奨

勵は無くなつて、上等な獎勵ばかり存してゐるのである。

斯ういふ話の中に、エヂスが外出の装ひで現はれて来た。父の醫士に何やら告げに来たのである。醫士はそれを聞いて、『エストさん、エヂスは今陳列場に行くそうですがあなたも一つ實地を見て来てはドウです。』

(八) 商品陳列場

エストとエヂスとは物品陳列場に出かけて行つた。『エストさん、是れが私達の區の陳列場です』とエヂスが云ふのを見ると、今朝エストが散歩の時、何か知らんが大きな建築だと思つて見た其の建物である。中に入ると、光線のよくはいる廣い大きな土間で、眞中には噴水があつて、其の周圍には捨床などがあつて、そして四方の壁に添うて色々の店があつて、其上には大きな看板が掛かつて居る。メリイはモスリンの店へ足を向けた。

『オヤ、こゝには番頭も小僧も居ませんね。』『まだ誰も居なくて可いのですよ。私ま

だドレにするか極めないのですもの。』

成程、品物の選びをする間は誰も居なくて可い筈である。そこに並べてある多くの見本には一々札がついてゐて、其品の産地、性質、値段等が明細に記してある。エヂスは暫らくアレコレと見た上で、直ぐ側にある呼鈴の鈕を押した。すると一人の書記がヒョッコリそこに現はれて、エヂスの注文を是々と聞いて、直ぐにサラ／＼と注文状を書いて、それを小箱に入れて運輸管の中に落した。運輸管と云ふのは水道の鐵管の様なもので、空氣の壓力を用ゐて、手紙でも、小荷物でも、極めて速かに遠方に送る事になつてゐる。それからエヂスは切手を出して書記に渡すと、書記はモスリンの價だけを銜み切つてエヂスに返した。するとエヂスはもうサツサと行きかける。エストは不思議に思つて、『エヂスさん、こゝは見本ばかり陳列する所ですか』と問うた。

『オホ、陳列場は皆な見本ばかりですよ。品物は市の中央倉庫にあるのですもの。先刻書記が注文状を運輸管に入れましたでせう。今頃はあれが中央倉庫に届いて居ま

せう。『なる程。』『中央倉庫では諸方の陳列場から来る注文を受けつけて、直ぐに荷作りをして、直ぐに運輸管で送り出すのですが、其の手順の早いこと云つたら、見て居ても心地の善い程ですよ。』『なる程。そして其の品物は此の陳列場に届くのですか。』『いゝえ、それは別に昔の郵便局のような者が各區にありまして、中央倉庫からそこに届くと、直ぐにそこから内に配達して呉れます。是れから内に歸つたら、度もうモスリンの小包が届いてるませう。』『なる程、然しエヂスさん、こんな便利な事は大きな都會より外には迎も出来ずまいね。』『ナニ、大概の村には陳列場がありません、そしてヤハリ運輸管が近所の都會に通じてるますから、別に大した不便はありません。』

(九) 音楽、遺産、家事、醫者

陳列場から歸つて来て、エヂスはエストを音楽室に導いた。『今は五時ですね。サア此表の中から何でもアナタが望みなさい』と云ひながら、エヂスは一枚の印刷物を

エストに渡した。それは音楽の目録で、上の方に二千年九月十二日とあつて、それから時間に分けて目録が出来て居る。エストは五時の所に色々書いてある中からオルガンを所望した。エヂスは部屋の隅に行つてネジを二つ三つ掛けたやうだつたが、間もなく劉亮たるオルガンの響が室内に漲りわたつた。エストは驚いて、只だ感に堪へてゐる。それが一曲すんだ後、エヂスは更にヴァイオリンの一節を聞かせた。エストが終に其の不思議な仕掛について尋ねると、エヂスは笑ひながら、『別に不思議な事はありません。品物の配達と同じ道理ですもの。市の中央に大きな音楽堂があつて、少しの費用を拂へば、そこから其家に電話を掛けるのです。そして毎日目録を配つて来るのですが、御覧の通りどんな種類の音楽でも大抵無いものはありません』と説明した。『成程。總べての人が自分の内で何の音楽でも自由自在に聞く事が出来る。文明の進歩も實にこゝまで来ると極點ですね』とエストは彌々感心した。

其夜、エストは醫士夫婦と様々の話をしたが、何の序からか財産相續の話になつ

て、『では、今の社會では財産の相續を許さないのですね』と問うた。『左様、人が死ぬれば一定の葬式料を興へられるきりで、切手の効力は無くなるのです。然し、其他の所有物は自分の好きな人に譲る事が出来るのです。』『では其財産が段々蓄積されて、又貧富の不均を生ずるではありませんか。』『イヤ、そんな氣遣ひはありません。今日の考へでは實際入用の無い物を澤山に持つてゐるのは、邪魔で困る、面倒で仕様がな」といふので、不必要な物は皆な國庫に返してしまひます。』

それから話は家事の事に移つた。昔でも随分下女下男の使ひ方にはドコの細君も困つたものですが、此の平等の社會には猶更であらうと思はれます』とエストは云つた。『イヤ、今の社會では眞に總べての人が平等であるのだから、どんな役目を務めたか」と云つて、其の平等に傷はつきません。人は皆なお互に他人の爲に務めあふと云ふのが根本の主義ですから、家事の職務であらうが、何であらうが、不平を云ふものはありません。然し、我々はそんな人を使ふ必要は無いのです』と醫士が云つた。『では

ドナタが臺所の事などをなさるのです。』『別にする程の事は無いのですもの』と今度夫人が相手をして、『洗濯は極僅かな費用で公立の洗濯所でやりますし、料理には公立の料理所がありますし、着物も公立の裁縫所で拵へますし、火や光は勿論すべて電氣でやりますし、家は御覽の通り手数の掛からぬやう掛からぬやうと、どこまでも便利に作つてありますし、家内に人を使ふ必要は少しもありません。』『なアる程。それでは今の社會は全く御婦人達の極樂ですね。』

話は更に醫士の事に移つた。『それでは醫士もヤハリ其筋から派遣されるのですか。』『イヤ、醫者は平生から患者たる人の生理上の状態に熟して居る必要もあるので、矢張り昔の風にしてあります。只、其の費用が一定して居つて、醫者が其の費用を患者の切手から取つて其筋の役所に届けるだけが違ふのです。』『では皆が上手な醫士の所にばかり行つて、下手な醫士は丸でヒマと云ふ様な事になりはしませんか。』『それは非役の醫者たる私としてはチト云ひにくい事ですが、今の社會で醫者になる程の者に

下手のある筈はありません。それに醫者は常に醫務局に對して業務の報告をして居るので、若し相當に務めて居ない事が見える時には、勿論たゞちに他の職業に移らせま

(十) 勞働隊の獎勵法、患者隊

其夜又、婦人達が寢室に退いて後、エストは久しく醫士と語つた。其の語つた所は彼の勞働隊の事で、エストは昨夜から今朝にかけて聞いただけではドウしても獎勵が不足のように思はれて、それだけで人が果して十分に勉強心を起すであらうかと危まれるので、重ねて其事を醫士に尋ねた所が、醫士は次のような説明を與へた。

勞働隊には各隊に部長があり隊長があり、又進んでは高級の役人がある。それで先づ最初の三年間は普通勞働員として、從順、勤勉等の習慣を教へられ、其間に絶えず成績を注意されて居る。それから各々専門を撰んで其の職業の徒弟となる。徒弟の年限は職業に依りて一定せぬが、其の修業を終つて後はじめて其隊の隊員となる。隊員

は總て三級に分たれて、其の各級が又上下に分たれて居る。各員は普通勞働員及び徒弟としての成績に依つて、或は一級となり、或は二級となる。然し大概は最初三級になつて段々と進んで行く。それから各隊を區別する徽章があつて、隊員は皆それを付けて居るが、級に依つて金、銀、鐵の差別がある。其他にもまだ色々、特權、自由、免除等の形を以て獎勵を與へる小方法が幾つもある。それで生涯最下級に残る者は極めて少數で、大概の者は多少の昇進をして多少の名譽を得る事になつて居る。然し、働きの出来る者が我儘で働かない場合には、随分嚴重な制裁があつて、直ぐに禁錮してパンと水とばかりを與へておく。

次に、第一級(即ち最上級)を二年務めた者の中から副部長を選ぶ。既に役人になつた以上は其の部下の成績に依つて其後の昇進をする。それで副部長の中から成績に依つて部長を選び出す。それ以上の昇進については又別の定めがあるが、それは今こゝで説明が出来ない。元來、階級と云ひ、名譽と云ひ、此様な獎勵がなくては人が働

かないと云ふのは甚だ淺ましい事なのだが、二十世紀の終りなる今日に於ても、人の心がまだそれ以上に進まないから仕方がない。

それから醫士は又、患者隊と言ふ者の事を説明した。患者隊とは身體及び精神の不具者を別に集めて、それに相應する軽い仕事を宛てがふのである。エストはそれを聞いて、『それは善い思付ですね。慈善もソウ云ふ風になると大變に善くなる』と感心する。醫士は驚いた様子で、『ナニ慈善！ あなたは患者隊を慈善と思ひますか。』『でも慈善ではありませんか。彼等に獨立の生活の出来ない以上は。』『獨立の生活！ 誰にソナナ事が出来ですか。人類がまだ家庭を作らなかつた昔こそは、或は獨立の生活も出来たか知らないが、少しづつでも共同生活を始めてからはモウ獨立なぞと云ふ事はないのです。文明の社會は人々が互に依頼して互に助けあふのが一般の法則です。』『でも人を助けるほどの力の無い者に對しては？』『イヤ、力の有無に係はらず、苟くも人たる以上は同様です。』『では、盲も、聾も、病身者も、屈強の働き手も、皆な同

じ分配を受けるのですか。』『勿論、マア考へて御覽なさい。あなたの家に病身な弟があつたとして、其時あなたは其弟に自分のよりも粗末な着物を着せ、粗末な部屋に入れ、粗末な食物を與へますか。そしてアナタはそれを慈善と云ひますか。』『如何にもソナナ事は出来ませんが、然し、四海兄弟と言ふのは骨肉の兄弟とは違ひますか。』『そこが即ち十九世紀の考へですよ、廿世紀の文明の根本は、此の人類同胞、四海兄弟の思想を、骨肉の同胞兄弟の場合と同じ様に、實際に感じて來た所に在るのです。』『成程。然しドウも、自分に働きの出来ない者が社會の産物の分配を要求する権利があると云ふのは分りませぬね。』『そんな事を云ふものではありません。假令屈強な働き手でも祖先以來數千万年の御蔭に依つてこそ今日の様な産物を作り得るではありませんか。して見れば、我々健全な者も、病身な者も、不具者も、皆な一樣に此の祖先の譲り物を受けつぐべき権利があるのではありませんか。それを強い者が勝手に取上げておいて、ホンの少しづつ弱い者に分けてやつて、ヤレ慈善だの、

ヤレ救助だのとは、随分蟲の好い話ではありませんか。』

(十一) 世界聯邦、國際會議

其夜エストは音楽の電話の使ひ方を教へて貰つて、丁度目ざまし時計の様にネジをかけておいて眠に就いた。翌朝は大變に愉快な夢を見ながら目が醒めた。醒めて見ると、勇ましい音楽の響が寢室に満ちて居る。其お蔭で今朝はモウ何の煩悶もなく起き出で、愉快に食卓に就く事が出来た。

食後の話は、今度は國際の關係に及んだ。醫士の説明に依れば、北米合衆國の率先に依り、歐洲諸大國、濠洲、メキシコ、南アメリカの諸國など皆おひくくに新社會の經濟組織が出来て、それ等の國々には緩やかな世界聯邦を形作つて、國際會議を設けて相互の交際及び貿易の事を議定し、猶ほ他の後進國に對しては、漸次文明の制度を採用せしめるやうに、合同政策を立てる事になつてゐる。そして各國家には十分自由な自治が行はれてゐるのである。

エストは又忽ち疑問を起した。『貨幣が無くてドウして貿易が出来ますか。』『それは斯うです。貿易といつても、今日では國と國とが單位になつてヤルのですから、世界中に僅々十人か十五人かの商人があるわけですから、取引は極めて簡單で、一冊の帳簿があれば其れで澤山なのです。』

エストは又別の疑問を起した。『或一國の人が他國に旅行する場合は貨幣なしでドウするのですか。』『アメリカの切手はヨーロッパにも有効です。例へば、アメリカの人がベルリンに旅行した時、其の所持の切手を市役所に持つて行けば、入用の分だけ獨逸の切手に替へて貰ふ事が出来るのです。』

(十二) 道路の雨蔽、公食堂

(111) 此日リート家の人々はエストを公食堂に案内する事となつた。エストは公食堂と聞いて不審そうな顔付をして居るので、醫士は『昨夜もお話した通り、我々の食物はすべて公立の料理所から供給されるので、大概、朝と晝との二度は内で手輕な物を食

べて、夕方だけ皆な一緒に公食堂に行つて御馳走を食べる事になつて居るのです。然し此の兩三日は、アナタが今少し物馴れる迄と言つて、出かける事を見合せて居たのです」と説明した。

然るに、晝すぎになつて雨が大變に降りだしたので、今日も亦た公食堂行は駄目だらうとエストは思つて居た所が、其の時刻になると、夫人もエヂスもチャンと仕度をして部屋から出て來た。そして傘も持つて居ないし、雨靴も穿いて居ない。エストは不思議だと思ひながら附いてゆくと、成程、表に出て見ると傘は入らない。通りの兩側の人道には一面に雨蓑が張つてあつて、丸で廊下の中を歩くやうな心地である。それにエストが驚いて居ると、エヂスはクス／＼笑つて居る。醫士はエストを振返つて、『エストさん、是れが即ち十九世紀と二十世紀と違ふ所ですよ。ボストン市の何十万人の人が、雨が降るといつて銘々に何十万本の傘をさした所が十九世紀の特色ですね。二十世紀では何十万の人が只つた一本の傘をさして居るのです。』

エストは頗る赤面したが、兎角する中に早や公食堂に來た。大きな石段を上つて、長い廊下を曲つて行くと、或る部屋の戸に醫士の名札が掛つて居る。其戸をあけて中にはいると、丁度四人坐れる程の立派な食卓が整へてある。大きな窓の外には噴水の高くあがるのが見えてゐる。どこからか音楽も聞えてゐる。『是れでは丸で御自分の内様ですね』とエストはいふ。『是れが矢張り我々の内なのです。只少し離れてゐるだけの事で、區内の住人は少しばかりの費用を拂つて皆な此の建物の中に一間づゝ自分の食堂を持つてゐるのです。通りがりの人などの爲には別に又部屋もあります。』そこに給仕の少年がはいつて來た。給仕とはいへ、人品のある、相應の教育を受けたらしい容貌である。醫士は何やら云ひつける。少年は一々承知して引下がる、其の様子を見るに、云ひつける方でも向ふを輕蔑するやうな風は無く、云ひつけられる方でも別段に恐縮するやうな所は無い。

エスト『あんな立派な少年がよくコンナ賤しい事に甘んじて居るものですね。』醫士

『今の社會には賤しいといふ事は一つもありません。』ではアノ少年等は自ら好んで給仕をやつてゐるのですか。『イヤ、自ら好む譯でも無いが、彼等は即ち雑務に従事する普通勞働員なのです。私も四十年ほど前に、丁度この公食堂で六個月ばかり給仕を勤めましたよ。總べて我々の働くのは、此の國民の爲にするのですから、給仕であらうが、何であらうが、少しも恥づる所は無いです。若し一個人の爲に働くの賤しいとするならば、給仕も、醫者も同じ事です。今日はアノ少年が私の爲に給仕をするが明日は私がアノ少年の爲に診察をするかも知れません。そんな事に貴いも賤しいも在つたものではない。』

食事が済んで後、醫士等はエストを案内して此の公食堂の内部をアチコチと見せて廻つた。其の建築といひ、其の裝飾といひ、將た又食事の善美を盡して居る事といひエストは只一々驚いてゐる。醫士曰く、『我々は面倒を避ける爲に、自宅では何事も成るべく簡略にしておくが、其代り社交の方面は十分に飾つて、十分に楽しむのです。』

(十三) 著述及新聞

醫士等はエストを案内して公食堂内の圖書室に來た。話は著述の事に移つた。夫人も近來の傑作の小説について盛んに噂をしてゐた。醫士の説明によれば、二十世紀に於ける此の經濟組織の大變化は人心に著しい影響を與へて、燦然たる文化が一時に煥發した。即ち工藝上の發明、學理上の發見、文學、美術、音樂等の製作物が續々として現はれたといふ事である。

それから話は書籍出版の方法に及んだ。其の方法は、政府に出版局があつて、何人の著述でも其の希望によつて出版するのだが、其の費用は著者に於いて負擔せねばならぬ。著者は其書に價があると信する時には、半年一年の生活費を節して出版費を作り、出版局に頼んで賣出して貰ふ。そして其本がよく賣れた時には、政府は其の收入を計算して、其れに相當する年數だけ、其の著者の他の勞働を免除する。其の免除は何も其人に對する賞與或は報酬ではなく、更に他の有益な著述をさせる爲に時間の餘

裕を興へるのである。

次にエストは新聞紙発行の方法を醫士に尋ねた。是れは著述と少しく趣を異にして或る地方、又は或る業務に就いて新聞紙を發行したいと思ふ時には、其の費用を償ふに足るだけの購讀者を募つて、そして其の購讀者が記者を選擧する。選擧された人がそれを承諾すれば、政府は其の在職中、其人の他の勞働を免除する。それから其の記者が新聞を編輯するのは矢張り昔の風と同じである。

* * * * *

其の翌朝の事、エストとエヂスと又た色々の話をしてゐたが、話は祖先の事になつて、『エヂスさん、私はあなたの曾祖母さんか曾祖父さんかを知つてゐるかも知れませんが、私は随分交際を廣くして居ましたから、其頃のボストンの人は大概知つてゐました。若しか私とアナタの曾祖母さんと極懇意な間柄でもあつたら、随分おかしいではありませんか』などとエストは話しました。エヂスは笑ひを含んで聞いてゐた

が、『ほんとにソナ事があつたらおかしいでしょうね』と云つた。『ためにアナタの御先祖を調べて御覧なさい。エヂスさん』とエストは頗る熱心である。エヂスは彌々笑を含んで、『そうですね。いつか善く調べて見ましよう。』

(十四) 行政組織

其日エストは醫士に連れられて中央倉庫を見に行つた。是れで分配機關の働きはスツカリ呑込めたが、今度は生産機關の働きに就いて疑問が起つて來た。

エスト『物品の過不足の無い様に、各勞働隊の仕事を決めるのは随分繁雜な手続きでしようね。』醫士『ナニ、仕掛は實に大きなものですが、事務は其割に頗る簡單です。今の社會では、針一本の行衛も明瞭になつてゐるので、國民の需要に就いて極めて精密な統計が出來て、それに對する豫算は譯もなく立てられるのです。それから生産部の全體は業務の大別によつて十省に分たれ、各省の下に各種専門の業務を代表する數局があつて、其局の下に各種の勞働團があるのです。それで大統領は分配部から提出

する統計によつて豫算を作り、それを各省に命令する。各省はそれを各局に割りあてる。各局は直ちに其團に於いて製造に着手する。マア斯う云ふ順序です。』成程、して其の省長なり、局長なり、團長なりはどうして任命するのです。』それは前にもお話しした通り、勞働員は部長から隊長に昇進して、それから團長になるのですが、團長は任命では無くて選挙に依るのです。』それでは團内に黨派などの出来る憂はありませんか。』イヤ其の選挙にも昔とは違ふ新案があるのです。即ち團長は隊長の中から選挙されるのですが、選挙人は勞働員ではなくて、團の名譽員です。名譽員といふのは、其團に於いて服役を終つた人々です。既にお話しした通り、我々は四十五歳で除隊になつて、それから自由な生活をするのですが、其の以後は團の名譽員として團長の選挙人となるのです。それから此の團長が即ち局長となつて行政の責任を負ふので此人が實際すべての勞働を指揮監督するのです。』では其上の省長は?』省長は昔の師團長(或は大員)ともいふべき者で、やはり團長の中から其省の管轄に屬する名譽

員に依つて選挙されるのです。それから此十人の省長の上に大統領があるので、大統領は一度省長を勤めた人の中から、勞働員以外の全國民に依つて選挙されるのです。』大統領の任期は?』五年です。五年の終には國會が開かれて、大統領は其の任期中の事を報告するのです。そして其の大統領が善く其の任務を盡したと認むる時には、國民は其人をして更に五年間國際會議の委員を務めさせるのです。』成程、そうすると醫師、教師の類はドウ云ふ風にして此の行政部と關係を持つのですか。』それは普通勞働團の外に教育團、醫務團等があつて、やはり其團の名譽員に依つて選挙された特別の委員會があつて、それで行政上の事を支配するのです。そして大統領は其の委員會の會長となつて裁決權を持つのです。』

其夜の談話にエストは又醫士に問うた。』一般の人が四十五歳で仕事を止めるのは餘り早すぎるではありませんか。』醫士は微笑しながら。』我々の眞の生活は四十五歳以後にあるのです。國民たるの義務として先づ勞働隊の服役を終り、それから我が好む所

に従つて自由の働きをするのです。旅行も、交際も、遊戯も、特殊な研究も、皆な除隊以後にあるのです。我々は四十五歳を以て初めて成年に達した様に思ふのです。それに社會改善の結果として、我々の健康も大いに進んで、今日では普通の人が八十五歳乃至九十歳まで生存するのですから、四十五歳は眞にまだ身心壯健の時代です。私はいつともそれをおかしく思ふのです、昔の人がモウそろく老衰しはじめた頃から、我々は初めて眞の生活に入るのですからね。昔の人は生命の前半を最も楽しい者に思つて居たのですが、今の人は其の後半を楽しむのです。』

(十五) 監獄、裁判所、警察、地方制度

エストは又其の翌日の朝の散歩に、昔の監獄の在つた所を見た。どこに移轉したやら影も無い。朝飯の食後で其事を醫士に告げると、醫士の曰く『左様、監獄の事は少し聞いては居るが、エストさん、今ではもうそんな者はありませんよ。我々は總べて非行あるものを舊性の發現として病院に入れるのです。』

エストは舊性發現といふ言葉を理解しかねてゐる。醫士は更に説明して曰く『昔し罪と稱したものは、十中の八九、社會の不平均から起つたもので、直接と間接の差こそあれ、畢竟は皆な金錢の慾です。然るに我々は今、各人に十分な衣食を與へて、一方に缺乏を防ぎ、一方に蓄積を許さないで全く此の禍ひの根を斷つたのです。又、金錢の欲と、生活の困難とに關係のない罪惡も、昔とは違つて今では總べての人に十分の教育を施すので、其數は非常に少ないのです。それで今日では總べての罪惡を犯すべき原因は全く消えたといつてもよいのです。然るに折々非行を致す者があるは、それは原因の無い犯罪であるから、どうしても舊性の發現と見るより外はない。十九世紀にも或種の犯罪を病氣と見た例があるではありませんか。我々は總べての非行を病氣と見て病院に入れるのです。』

エストは感心して、『成程。それでは今日の裁判所は誠に閑散な者でしょうね。財産の争ひは無し、刑事の犯罪者はなし、辯護士も、裁判官も、殆んど入用はありませんまい』

ね。』其通りです。我々の社會に辯護士などといふものはありません。裁判官は極少數です。そして別にやかましい法律などといふものもないので、裁判官は只だ世事に老巧な除隊者の中から五年の任期を以て任命されるのです。別に憲法の擁護者として大審院がありますが、其の職員は普通裁判官の中から選出されるのです。』『それでは今日の裁判制度はドンナものですか。』『それも犯罪の少數なるに連れて極めて微々たるものです。』『それでは地方制度はドンナ風になつてをりますか。』『それは完全な自治團體で、今の社會に最も重要な職分を持つてゐるのです。地方自治體は皆な其の地方労働隊の幾分を使用するの權を與へられてゐるので、それを使用して種々な公益事業を行ふのです。』

其日の午後、エストはエヂスと共に彼の地の底の寢室を見に行つた。云ふにいはれぬ奇異な感情が起らぬでは無いが、エストも最早ほど今の世の有様を呑込んで、今の世の人の心地がしばじめたので、モウ頭の割れそうに思ふ程の事は無い。エヂスは慰

め顔に、『あなたの見えなくおなりの跡で、嗚ぞ御親類達が悲しんでお居でましたらうね。』『私には近い親類もありませんでしたが、只ひとり、私の妻となるべき人がありまして、不思議な事には矢張りエヂスといふ名前でした。』

『マア。ほんとは不思議ですことね。嗚ぞ其お方が力をお落しなされたことでしょうか。』『失禮ですが、あなた其の寫眞を見てやつて下さいませんか』と、エストは肌につけてゐた昔のエヂスの寫眞を取出した。エヂスはそれを見て、ソツト我が唇に當てゝゐた。

エストは更に其の寢室の片隅にエヂスを伴うて、『こゝにある此の金庫の中に、私は萬一の時の用意と思つて、數万弗の金貨を匿しておきました。今となつては其れでパン一切れ買ふ事も出来ません』と深く感慨を催して居た。エヂスには何の事やら分らなかつたであらう。

又その翌朝、エストは醫士に連れられて學校を見に行つた。醫士の説明に依れば、今の教育制度の最も重要な點は、總べての人が一樣に高等教育を受ける機會を持つて居る事である。だれでも才能さへあれば大學まで行く事が出来る。其爲に國民の收入の半分を費すとも異存を唱へる者は一人も無い。それから普通教育について云へば、恰も昔の義務教育を中學校まで進めたやうなもので、總べての少年が皆な廿一歳までは同一の教育を受けるのである。

醫士が昔の社會を嘲る言葉に曰く、「幾ら自分達ばかり教育を受けて立派になつても周圍には無學な、無作法な、下等な人物が群がつてゐるのでは、嗚ぞ不愉快な事だらうと私などは思ひますね。幾ら自分のからだにばかり香水を振りかけても、くさい大勢の人の中に居たら堪りませんまいがねえ。猶ほ警へて見れば、如何に綺麗な部屋でも、其の窓の外が四方とも既か何かであつたなら、決して居心地は善くあるまいと思ひますね。」醫士又曰く、「一部分の人ばかりを十分に教育して、他の部分の人を全く教

育せずに置く結果は、明かなる階級を其間に生じて、全く違つた人種の様な感じを起す事になります。凡そ世の中に此くらゐ人情を傷つける事はありません。勿論、人の才能には大いなる差等があるが、一樣に教育を與へれば皆な相應の所までは進歩するのです。それを一部分の人が専有して他の部分に分たぬとは、何といふ不人情な仕方でせう。

エストが學校を見て特に深く感じた事は、其の生徒の體格のいづれも立派な事である。リート家の人々なり、其他一般の人々を見て、どうも昔の人よりは少し大きいようだとは思つてゐたが、學校の生徒を見るに及んで、明らかに其事を感じたのである。それで其事を醫士に告げると、醫士は非常に満足の様子で、「實際あなたにソウ見えませんか、我々は聊かそれを誇つてゐるのだけれど、皆な推測ばかりで十分の證據にならなかつたのですが、あなたの目にソウ見るとすれば初めて確實の證據を得た譯です。實際我々は體育に重きを置いて、十分に注意して居るのです。」

其夕べ、學校巡視の歸りに、エストは醫士と共に公食堂でリート夫人とエヂスとに會して、四人一しよに食事をした。其の跡で又、婦人達は何やら用事があつて外に行き、エストと醫士とは久しく食堂に残つて生産分配の話をはじめた。醫士は昔の社會の個人生産法の不經濟を説いて滔々數千言に及んだが、こゝには只だ其の要領だけを記しておく。

個人生産の不經濟は、第一、見込達の企業から生ずる損失。第二、同業者の競争と敵視とから生ずる損失。第三、生産過多、恐慌、及び其の結果としての事業の停止から生ずる損失。第四、常に資本と勞力とを遊ばせる事から生ずる損失。

(十七) エヂスの秘密、婦人の地位

其夜、エストは音楽室でエヂスと語つて居たが、『エヂスさん、私一つお尋ねしたい事があります』と少し改まつて云ひだした。『マア、何の事で御座います』とエヂスは不思議そうにして居る。『若し間違つたら御免下さい、私が夢を見たのかも知れませ

んが、アノ私が初めて目の醒めかけた時に、先づ私の耳にヒソ／＼と話をする人の聲が聞えました。跡で思へば、それはアナタとアナタの御両親との聲だつたのです。それで其時アナタは、アノ事はまだ話さずに置いて下さいよ』と仰しやる。父上は別に確とした返事をなさらぬ。そうするとアナタが是非にと仰しやる。母上もアナタの加勢をなさる。それで父上も止むを得ず承知をなさる。そうする中に私の目が醒めて見ると、父上が只ひとり居られたのです。斯う私は記憶して居りますが、アレは一體どういふ譯ですか、差支なくば御話し下さいませんか。私は何だか氣に掛かつてなりません。』

エヂスは之を聞いて顔から首まで眞赤になつた。エストは扱こそ夢では無かつたと思ひながら、『エヂスさん、何やらそこに秘密がある様に見えますが、若し私の身に關する事だつたら、どうかそれをお話し下さいませんか。私は氣になつて埒りません。』エヂスは漸く幽かな聲で、『でも、それは深くアナタに關すると云ふ事でもありません

もの。』イヤ、それでも何か私に關係のある事には相違ありません。』エチスは彌々赤くなつた。エストは其意を解しかねたが、エチスの耻ぢらふ様子が美しいので、少しはカラカふような氣にもなつて、『どうしてもお話し下さる事は出来ないのですかねえ。それならば致方はありません』と少しスネル。』でも、それは……あなたのお心次第です。』『私の心次第！ それは又どういふ譯です。』『もう其事は好いではありませんか。折角の音楽を聞きそこなひますよ』とエチスは壁の釦を押した。暫らくは妙なる音楽に話しも途切れたが、それが終つた後、エチスは改めてエストに向ひ、『エストさん、お願いですから、どうぞ其事は聞かずに置いて下さい。父にも母にもお話しなさつては厭ですよ。』そうまでいはれて見ると、エストも仕方がない。其夜は其儘にして別れたが、思へば思ふほど不思議で堪らない。寢床に入つても眠れないので、明方近くまで悶えて居た。其の翌朝、彼はエチスの事を思ふつひでに、フト今の社會の婦人の地位について疑問を起した。朝飯後の談話に其事は醫士に問ふと、醫士は頗る

簡単に説明した。曰く、『今の婦人は男子と同じく労働隊の労働員となるのです。但し母としての任務を盡す間だけは免除されるのです。それで結局、婦人は前後數回に、五年、十年、或は十五年ぐらゐの服役をするのです。』『では婦人が結婚したからとて必ずしも除隊となる譯ではありませんね。』『勿論、別に家事といふはなし、夫は子供の様には始終世話をしてやらねばならぬ者ではなし、除隊となる筈がありません。』猶ほ醫士の説明に依れば、婦人の労働は固より男子に比して軽い者で、殊に其性に適する種類を選び、時間も短かく、必要の場合には休暇も多く定めてある。それから婦人隊は全く男子隊と別になつて居て、婦人の總元締があつて、それが大統領の下に立つて他の諸省長と共に内閣を組織して居る。そして婦人の事に關しては裁可權を持ち、國會に對して責任を負ふ事になつて居る。又婦人の裁判官があつて婦人間の事を裁判して居る。

エストは、今度は婦人に對する分配の事について疑問を生じて來た。『それでは婦人

に對しても男子と同額の切手を與へるのですか。』『勿論。』『私は又、婦人は折々勞働隊を退くので分配も少いかと思ひました。』『そんな事はありません。マア善く考へて御覽なさい。勞働隊を退く代り、子を生み子を育てるといふ大役を務めるではありませんか。國民は何よりも先づ此の大役に向つて感謝せねばなりません。若し分配に差等を付けるならば、寧ろ婦人には多く與へるが至當かも知れません。』『それでは生活上について妻は少しも夫に依頼する事はないのですね。』『勿論。生活については妻は夫に依頼する事はないし、子も親に依頼する事はないのです。子は成長してから親の爲に働くのではなく、國民の爲に働くのだから、國民の公費を以て養ふのは當然の事です。今の社會では、男も女も、子供も、皆直ちに國民に屬するので、親は只だ數年の間、世話人として子の爲に働く迄の事です。』

それから話は結婚問題に移つたが、醫士の説明に依れば、今の社會に於いては、男女とも全く對等の地位に立つて相交るるので、結婚は只だ愛情にのみ依つて成り立つ

のである。そして又、今の社會に於いては、我が子に残すべきものは、財産でも地位でもなく、全く身心の美質のみであるから、配偶者の選擇には誰も皆な十分に心を用ゐる。それで獨身者といへば大抵世に信用を失つた人々である。今の婦人は次の時代に對する責任を重んじて、善い子を生まねばならぬといふ義務の念が強くて、殆んど宗教的の信仰と熱心とを示して居る。其の兩性淘汰の結果として、今の人は、精神に於いても、體格に於いても、著しい進歩をしたのである。

(十八) 昔のエヂスと今のエヂス

今日は説教を聞くといふので、エストは會堂に行く事かと思つてゐたら、今の説教は會堂に行つて聞く事も出来るが、大概は電話で聞くのだといふ。今日は有名なバルドン氏の説教があつて、それは電話に限るのだが、聴衆無慮十五万人と云ふ事である。食後一二時間を経てリート家の人々は音楽室に集まつた。エヂスは例の鉤を押した。バルドン氏の神々しい聲は間もなく聞えはじめた。然るに其の説教の冒頭は、『今度我

々は不思議にも十九世紀の人を生ながら見る事を得た』といふ様な事だつたので、エチスは氣兼ねして暫らく電話の響を止め、他の説教にしようかとエストに問うた。けれど、エストが少しも構はぬといふので、又其續きを聞く事になつた。説教の本文は略しておくが、エストは其の説教を聞いて甚だ深く感ずる所があつた。即ち十九世紀と二十世紀との差異を著しく説き聞かされて、自分と今の世の人との間に到底越ゆべからざる隔てのあるにも係はらず、彼れ是れ思ひあはせると、エストはどうしてもエチスに對して戀着してゐるのである。是れはもう自ら欺く事の出来ないほどになつてゐる。あゝ世を隔てた人に向つて戀をするとは、何といふ心ぼそい事だらう。エストは其日の午後、又彼の地の底の寢室に行つた。『あゝ是れより外に己の家はないのだ。己はこゝに居てモウどこにも出ないが善いのだ。』斯う思ひながら部屋の中を見廻しつゝ、強いて思を昔に寄せたが、斯うまで遠く過ぎ去つた昔はモウ少しも我を慰めるに足りない。エストは死んだでもなく生きて居るでもなく、一種不思議の苦しい感じに襲は

れて居た。

そこにエチスが思ひがけなく顔を出して、『跡をつけて來ましたよ』といつて、ニコニコ笑つて居る。エストは其光に打たれて却つて愁を増すのである。『又何を考へ込んでいらつしやる。御邪魔になりますか。』『いえ、どうぞおはいり下さい。然し私はモウお話をする心地もありません。』『どうして？ どうして又そんな事を？』『あなたは親切にして下さるし、私も勉めて今の世の人にならうと思つてゐましたが、今日バルトン氏の説教を聞いて、つくづくと感じました。逆も私は今の世の人には成れませぬ。』『あら又そんな事を。あんな説教を御聞かせするのではなかつたに。あれはバルトン氏がアナタを見もしないからの事です。私達の考へは又それとは違ふのです。私達がイツあなたに隔てをしました。私達は少しの隔てもなく、全く内の人と思つて居るではありませんか。それはあなたにも大概お分りになつて居るものなのです。』

エチスは言葉^{ことば}を盡^{つく}してエストを慰^{なぐさ}めた。其^{その}の情^{なさけ}らしい色^{いろ}と聲^{こゑ}とは終^{つい}にエストを動か^{うご}した。彼^{かれ}は終^{つい}に堪^たへずして其^{その}愛^{あい}の心^{こころ}をエチスに告^つげた。エチスも亦^{また}終^{つい}に久^{ひさ}しく包^つむ事^{こと}が出来^{でき}ないで、深^{ふか}くエストを愛^{あい}する旨^{ねが}を答^{こた}へた。『然^{しか}しマア、まだ一週^{しゅうかん}も立たない交^{かう}際^{さい}の間柄^{あひだち}で、こんな事^{こと}をお話^{おた}しするとは！』とエチスは稍^{やや}や安^{やす}んぜぬ様^{よう}子^すであつたが、『是^{こゝ}れには外^{ほか}に譯^{わけ}もあるのです。それはドーゾ母^{はは}からお聞^きき下^{くだ}さいまし。其上^{そのうへ}で又^{また}改^{あらた}めてアナタの御^ご心^{こころ}も伺^{うか}ひましよう』と云^いひ終^おつて出^いて行^いつた。

エストはエチスの跡^{あと}を追^おうてリート夫人^{ふじん}の部^へ屋^やに來^きた。エチスは何^{なに}やら夫人^{ふじん}の耳^{みみ}に囁^{ささ}いておいて、バタバタと駈^かけて行^いつてしまつた。其^{その}の跡^{あと}で夫人^{ふじん}がエストに語^{かた}つた所^{ところ}に依^よれば、此^{この}エチスはエストの戀^{こひ}人^{びと}であつた其^{その}昔^{むかし}のエチスの曾^{ひま}孫^{まご}である。其^{その}昔^{むかし}のエチスはエストの死^し後^ごを弔^{とら}ふこと十四^{じゅうし}年の後^{のち}、初^{はじ}めて或^{ある}紳^{しん}士^しと結^{けつ}婚^{こん}して其^{その}間^{あひだ}に一人^{ひとり}の男^{をとこ}の子^こを生^うんだのが即^{すな}ち今^{いま}のリート夫人^{ふじん}の父^{ちち}だといふ。夫人^{ふじん}は其^{その}の祖^そ母^ぼを見^みた事^{こと}は無^なかつたが、其^{その}の身^みの上^{うへ}の話^{はなし}は善^よく聞^きいて居^かいたので、それで自^じ分^{ぶん}の娘^{むすめ}に其^{その}名^なを付^つけ

(135)

たのであつた。それで今^{いま}の此^{この}エチスは、其^{その}の名^な前^{まへ}の因^{いん}縁^縁からして深^{ふか}く其^{その}の曾^そ祖^そ母^ぼの事^{こと}を思^{おも}ひ、又^{また}エストから送^{おく}られた手^て紙^{がみ}の残^{のこ}つたのを讀^よみなどして、『私^{わたし}もエストといふ人^{ひと}の様^{よう}な眞^{しん}實^{じつ}のある人^{ひと}とでなければ結^{けつ}婚^{こん}しない』などと戯^{たむ}れに云^いつた事^{こと}もあつた。然^{しか}るにエストが、地^ちの底^{そこ}から堀^ほり出^だされた時^{とき}、其^{その}胸^{むね}にあつた戀^{こひ}人^{びと}の寫^{しゃ}眞^{しん}が第一^{だいいち}の證^{しょう}據^ことなつて、其^{その}他^{ほか}種^{しゆ}々^々取^と調^{てう}の結果^{けつ}、是^{こゝ}れこそエスト其人^{そのひと}と知^しれた次第^{しだい}である。エストは直^ちちにエチスを探^{たづ}ねて限^{かぎ}りなき満^{まん}足^{ぞく}の意^いを告^つげた。其^{その}夜^よ二人^{ふたり}は庭^{てい}園^{えん}に月^{つき}の光^{ひかり}を浴^あびて夜^や半^{はん}過^すまで語^{かた}つて居^かたが、今^{いま}はモウ何^{なん}の秘^ひ密^{みつ}も無^ない。エチスは最^{さい}初^{しよ}エストが目^めの醒^さめかけた時^{とき}の事^{こと}を説^{せつ}明^{めい}した。あの時^{とき}、父^{ちち}は、是^{こゝ}れくの續^つきあひだと話^{はな}したら、あなたが必要^{かなら}安心^{あんしん}なさるだらうといふのです。父^{ちち}は男^{をとこ}ですものねえ。私^{わたし}の事^{こと}など考^{かんが}へては呉^くれないのです。それから母^{はは}が味^{あじ}方^{かた}をしてくれたので、ヤット云^いはない事^{こと}になつたのです。其^{その}ヒソ／＼話^{はなし}がアナタに聞^きえて居^かようとは、本^{ほん}當^{たう}に思^{おも}ひもかけない事^{こと}でした。』

『モシモシ、旦那モウお目さめになりませんか。九時が過ぎました』と呼ぶのは我が老僕の聲である。エストはフト目を醒ました。彼は地下室の寢臺の上に寝て居るのである。『何をビツクリして居らつしやいます。マア是れでも召上りませ』と老僕はコツプを差出した。是れは例の動物電気博士の置いて行つた目さましの薬である。エストはそれを飲んでヤット分つた。彼は百年後の社會を夢みて居たのである。そこにある新聞紙を取上げて見ると、正に一八八七年五月三十一日と記してあつた。(完)

大正九年二月五日印刷
大正九年二月八日發行

定價壹圓貳拾錢

著者 堺利彦

東京市神田區中猿樂町十五番地
合資會社アルス代表者

發行者 北原鐵雄

東京市神田區中猿樂町十五番地

發行者 鈴木泉藏

東京市神田區西小川町一丁目九番地

印刷者 太刀川辰藏



發行所

東京市神田區中猿樂町十五番地

合資會社アルス

電話本局二九八八番
振替東京二四八八番

前田蓮山氏著

社會の徽

四六判

定價壹圓四拾錢
送料八錢

眞の人間生活のために社會の徽の撲滅を絶叫す。舊思想舊制度舊習慣其他人間社會を毒する偏見謬想迷信乃至官僚議員の類三十餘種を擧げて深刻犀利なる快筆を揮へるもの即本書也。辛辣なる皮肉、痛快なる罵倒、輕妙なる諷刺、何人も共鳴同感禁ずる能はざる空前の快著、改造の第一歩實に茲にあり

與謝野晶子女史著 山本鼎氏裝

激動の中を行く

四六判 定價壹圓六拾錢
箱入 送料 十二錢

思想の動搖、生活の實際的脅威。大戰の後を承けた全世界は今や未曾有の混亂激動に悩んでゐる。婦人の解放、資本家對勞働者の鬭争、過激思想の宣傳等吾人は實に暗黒な腥風の吹きすさむ荒野を彷徨してゐる感がある。本書は思想界の先覺たる與謝野女史が自己の經驗を基底として婦人問題、社會問題等に亘り穩健にして、しかも熱烈なる意見を發表されたもので、今後の生活は如何なる理想と様式に於て改造すべきか、先づ論壇の明星たる女史の言に傾聴すべきである。

日本のユウモリスト
貝塚 澁六氏 著

著者と同身一体の友人
堺 利彦氏 序

猫の百日咳

四六版 定價壹圓四拾錢
美本 送料 八錢

文壇嘗て見ざる諷刺滑稽の妙筆と燦然たる新思想の輝を見よ

澁六と誰ぞ。燦犀の眼光、椽大の筆、戲謔百出、機智縦横、その精密なる數理的頭腦は著者の祖先壹萬九百九拾五億二千百六十二萬五千七百七十人なるを證明し、諷刺骨を刺す處、艶笑花の如きカフエーの女給は代理妊娠に成功し、消化係の壯漢は嘔吐して美人を奔らす。關夜に輝く白面爛眼の社會黨大臣の車夫時代、曰く何、曰く何、滑稽突梯の間に現代を震撼する新思想を孕み日本管てあらざるユウモアを藏す。日本のユウモリストか日本一のソウヤリストか、人奇、筆奇、書は更に奇也

堺利彦氏譯(レスター、ウオード原著)
山川菊榮女史譯(エドワード、カーペンター原著)

女性中心と同性愛

四六判 定價壹圓六拾錢
箱入 送料十二錢

光彩燦然、星の如く明らかに、露の如く清し。二個の新學說と二名家の譯筆と之を一巻の中に收むるもの只本書あり。男性は女性の派生物に過ぎず、又睪丸の獨立せるものに過ぎずとする奇抜の説は堺先生によりて傳へられ、男女を超越せる中性人の同性愛は菊榮女史に依つて述べらる。苟も兩性問題、婦人問題を語らんと欲する者は必ず本書に就かざるべからず

982
216

終

